

日蓮大聖人御書全集

ほうおんしょう

報恩抄

新版
212
ゝ
262

報恩抄

けんじ ねん がつ にち さい じょうけんぼう ぎじょうぼう
建治 2 年 ('76) 7 月 21 日 55 歳 浄顕房・義浄房

にちれん せん
日蓮これを撰す。

そ ろうこ つか 後 はくき もうほう おん 報
夫れ、老狐は塚をあとにせず、白亀は毛宝が恩をほうず。

ちくしょう 況 じんりん いにしえ
畜生すら、かくのごとし。いおうや人倫をや。されば、古

けんじゃ よじょう もの つるぎ 呑 ちはく おん 当
の賢者・予譲といいし者は剣をのみて智伯が恩にあて、

弘 えん もう しんか はら 割 えい いこう きも い
こう演と申せし臣下は腹をさいて衛の懿公が肝を入れたり。

況 ぶつきよう 習 もの ふぼ ししやう こくおん
いかにいおうや、仏教をならわん者の、父母・師匠・国恩

忘
をわするべしや。

だいおん 報

かなら ぶつぽう 習

極 ちしや

この大恩をほうぜんには、必ず仏法をならいきわめ智者

かな

たと

しゅもう

導

しょうもう

とならで叶うべきか。譬えば、衆盲をみちびかんには生盲

み

きようが

渡

ほう

ふう

わきま

おおぶね

の身にては橋河をわたしがたし、方・風を弁えざらん大舟

しよしよう

みちび

ほうぜん

至

ぶつぽう

なら

きわ

は諸商を導いて宝山にいたるべしや。仏法を習い極めん

思

暇

かな

暇

とおもわば、いとまあらずば叶うべからず。いとまあらん

思

ふぼ

しししよう

こくしゅとう

したが

かな

とおもわば、父母・師匠・国主等に随つては叶うべからず。

ぜひ

しゅつり

どう

弁

ふぼ

是非につけて、出離の道をわきまえざらんほどは、父母・

しししようとう

こころ

したが

ぎ

しよにん

思

けん

師匠等の心に随うべからず。この義は、諸人おもわく、顕

外

みよう

かな

思

げてん

にもはずれ冥にも叶うまじとおもう。しかれども、外典の

こうきよう

ふぼ

しゆくん

したが

ちゆうしん

こうじん

様

孝経にも、父母・主君に随わずして忠臣・孝人なるよう

見

ないてん

ぶつきよう

い

おん

す

むい

い

もみえたり。内典の仏経に云わく「恩を棄てて無為に入る

しんじつ

おん

ほう

もの

とううんぬん

ひかん

おう

したが

は、真実に恩を報ずる者なり」等云々。比干が王に随わず

けんじん

名

取

しつたたいし

じようぼんだいおう

そむ

さんがい

して賢人のなをとり、悉達太子の浄飯大王に背きて三界

だいいち

こう

第一の孝となりし、これなり。

ぞん

ふぼ

ししようとう

したが

ぶつぽう

かくのごとく存じて、父母・師匠等に随わずして仏法を

窺

いちだいししようきよう

覚

みようきようじゆう

うかがいしほどに、一代聖教をさとるべき明鏡十あり。

くしや

じようじつ

りつしゆう

ほつそう

さんろん

しんごん

けごん

いわゆる、俱舎・成実・律宗・法相・三論・真言・華嚴・

じようど

ぜんしゆう

てんだいほつけしゆう

じつしゆう

みようし

浄土・禅宗・天台法華宗なり。この十宗を明師として

いっさいきよう

こころ

知

せけん

がくしゃとう

思

じゆう

一切経の心をしるべし。世間の学者等おもえり、この十

かがみ

しょうじき

ぶつどう

どう

て

の鏡はみな正直に仏道の道を照らせりと。

しょうじよう

さんしゆう

置

たみ

しょうそく

小乗の三宗は、しばらくこれをおく。民の消息の、

ぜひ

たこく

渡

よう

だいじよう

是非につけて他国へわたるに用なきがごとし。大乘の

しちきよう

しょうじ

たいかい

じようど

きし

着

たいせん

七鏡こそ生死の大海をわたりて浄土の岸につく大船なれ

なら

解

わ

身

たす

ひと

導

ば、これを習いほどいて我がみも助け、人をもみちびかん

思

なら

見

だいじよう

しちしゆう

とおもいて習いみるほどに、大乘の七宗いずれもいずれ

じさん

わ

しゆう

いちだい

こころ

得

とう

も自讃あり。「我が宗こそ一代の心はえたれ、えたれ」等

うんぬん

けごんしゆう

とじゆん

ちごん

ほうぞう

ちようかんとう

ほつそうしゆう

云々。いわゆる、華嚴宗の杜順・智儼・法蔵・澄観等、法相宗

げんじよう

じおん

ちしゅう

ちしゅうとう

さんろんしゅう

こうおう

かじようとう

の玄奘・慈恩・智周・智昭等、三論宗の興皇・嘉祥等、

しんこんしゅう

ぜんむい

こんごうち

ふくう

こうぼう

じかく

ちしゅうとう

ぜんしゅう

真言宗の善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覚・智証等、禪宗

だるま

えか

えのうとう

じようどしゅう

どうしやく

ぜんどう

えかん

げんくう

の達磨・慧可・慧能等、浄土宗の道綽・善導・懷感・源空

とう

しゅうじゅう

ほんきよう

ほんろん

われ

われ

等、これらの宗々、みな本経・本論によりて、我も我も、

いつさいきよう

覚

ぶつゐ

極

うんぬん

一切経をさとれり、仏意をきわめたりと云々。

かひとびとゐ

いつさいきよう

なか

けこんきようだいいち

彼の人人々云わく「一切経の中には華嚴経第一なり。

ほけきよう

だいにちきようとう

しんか

しんこんしゅうゐ

法華経・大日経等は臣下のごとし」。真言宗云わく

いつさいきよう

なか

だいにちきようだいいち

よきよう

しゅしゅう

「一切経の中には大日経第一なり。余経は衆星のごと

ぜんしゅう

ゐ

いつさいきよう

なか

りようがきようだいいち

し」。禪宗が云わく「一切経の中には楞伽経第一なり」。

ないし　よしゅう

かみ　あ

しよし

せけん

乃至、余宗かくのごとし。しかも上に挙ぐる諸師は、世間の

ひとびとおのおの　思

しよてん

たいしやく

敬

しゆしやう

にちがつ

人々各々おもえり。諸天の帝釈をうやまい、衆星の日月に

したが

随うがごとし。

われ　ぼんぷ

しし

しん

ふそく

我ら凡夫は、いずれの師々なりとも信ずるならば不足あ

あお

しん

にちれん

ぐあん　晴

るべからず、仰いでこそ信ずべけれども、日蓮が愚案はれ

せけん

おのおのわれ

われ

こくしゆ

がたし。世間をみるに、各々我も我もといえども、国主は

いちにん

ににん

こくど

穩

いえ

ふた

ただ一人なり。二人となれば国土おだやかならず。家に二り

あるじ

いえかなら

破

いつさいきやう

の主あれば、その家必ずやぶる。一切経もまた、かくの

きやう

いつきやう

ごとくやあるらん。いずれの経にてもおわせ、一経こそ

いっさいきよう だいおう

じっしゅう しちしゅう

一切経の大王にてはおわすらめ。しかるに、十宗・七宗

おのおのじようろん

したが

くに

しちにん

じゅうにん

だいおう

まで各々諍論して随わず。国に七人・十人の大王ありて

ばんみん 穩

うたが

ひと

は万民おだやかならじ。いかんがせんと疑うところに、一

がん

た

われ

はっしゅう

じっしゅう

したが

てんだいだいし

もつぱ

つの願を立つ。我、八宗・十宗に随わじ。天台大師の専

きようもん

し

いちだい

しょうれつ

勘

ら経文を師として一代の勝劣をかんがえしがごとく

いっさいきよう

ひら

見

ねはんぎよう

もう

きよう

い

ほう

よ

一切経を開きみるに、涅槃経と申す経に云わく「法に依つ

にん よ

とううんぬん

ほう

よ

もう

いっさいきよう

て人に依らざれ」等云々。「法に依つて」と申すは一切経、

にん よ

もう

ほとけ

のぞ

たてまつ

ほか

ふげん

「人に依らざれ」と申すは、仏を除き奉つて外の普賢

ぼさつ

もんじゆしりぼさつないしかみ

奉

もろもろ

にんし

菩薩・文殊師利菩薩乃至上にあぐるところの諸の人師な

きよう

い

りようぎきよう

よ

ふりようぎきよう

よ

り。この経にまた云わく「了義経に依つて不了義経に依ら

とううんぬん

きよう

さ

りようぎきよう

もう

ざれ」等云々。この経に指すところ、「了義経」と申すは

ほけきよう

ふりようぎきよう

もう

けこんきよう

だいにちきよう

ねはんぎようとう

法華経、「不了義経」と申すは華嚴経・大日経・涅槃経等の

いこんとう

いつさいきよう

ほとけ

ゆいごん

しん

已今当の一切経なり。されば、仏の遺言を信ずるならば、

もつぱ

ほけきよう

みようきよう

いつさいきよう

こころ

知

専ら法華経を明鏡として一切経の心をばしるべきか。

ほけきよう

もん

ひら

たてまつ

ほけきよう

したがって、法華経の文を開き奉れば、「この法華経は、

しよきよう

なか

もつと

かみ

あ

とううんぬん

きようもん

諸経の中において最もその上に在り」等云々。この経文

しゆみせん

いただき

たいしやく

お

りんおう

のごとくば、須弥山の頂に帝釈の居るがごとく、輪王の

いただき

によいほうしゆ

しゆもく

いただき

つき

宿

頂に如意宝珠のあるがごとく、衆木の頂に月のやどる

しよぶつ ちようじよう にくけい じゅう

がごとく、諸仏の頂上に肉髻の住せるがごとく、この

ほけきよう けこんきよう だいにちきよう ねはんぎようとう いっさいきよう ちようじよう

法華経は華嚴経・大日経・涅槃経等の一切経の頂上の

によいほうしゆ もつぱ ろんじ にんし 捨 きようもん よ

如意宝珠なり。されば、専ら論師・人師をすてて経文に依

だいにちきよう けこんぎようとう ほけきよう すぐ たま

るならば、大日経・華嚴経等に法華経の勝れ給えることは、

にちりん せいてん しゆつげん とき まなこ 明 もの てんち み

日輪の青天に出現せる時、眼あきらかなる者の天地を見

こうげおんねん

るがごとく、高下宛然なり。

だいにちきよう けこんぎようとう いっさいきよう 見

また大日経・華嚴経等の一切経をみるに、この経文に

そうじ きようもん いちじいつてん しようじようきよう たい

相似の経文、一字一点もなし。あるいは小乗経に対し

しやうれつ 説 ぞくたい たい しんたい 説

て勝劣をとかれ、あるいは俗諦に対して真諦をとき、ある

もろもろ　くう　け　たい　ちゅうどう　讃　たと　しょうこく

いは諸の空・仮に対して中道をほめたり。譬えば、小国

おう　わ　くに　しんか　たい　だいおう　ほけきよう

の王が我が国の臣下に対して大王というがごとし。法華経

しよおう　たい　だいおうとう　うんぬん

は諸王に対して大王等と云々。

ねはんぎよう　ほけきよう　そうじ　きようもん　そうら

ただし、涅槃経ばかりこそ法華経に相似の経文は候え。

てんだい　いぜん　なんぼく　しよし　めいわく　ほけきよう　ねはんぎよう

されば、天台已前の南北の諸師は迷惑して、法華経は涅槃経

おと　うんぬん　もつぱ　きようもん　ひら　み

に劣ると云々。されども、専ら経文を開き見るには、

むりようぎきよう　けごん　あごん　ほうどう　はんにやとう　しじゅうよねん

無量義経のごとく華嚴・阿含・方等・般若等の四十余年の

きようぎよう　挙　ねはんぎよう　たい　わ　身すぐ　説

経々をあげて、涅槃経に対して、我がみ勝るといいて、

ほけきよう　たい　とき　きよう　よ　い　ないしほつけ

また法華経に対する時は「この経、世に出ずるは乃至法華

なか はっせん しょうもん きべつ さず え だいかじつ じよう
の中の八千の声聞の記別を授かることを得て大菓実を成

しゅうしゅうとうぞう

しよさな

ずるがごとし。秋収冬蔵して、さらに所作無きがごとし」

とう うんぬん われ ねはんぎよう ほけきよう おと 説 きようもん

等と云々。我と涅槃経は法華経には劣るととける経文なり。

きようもん ふんみよう

なんぼく だいち しようにん まよ

こう経文は分明なれども、南北の大智の諸人の迷つてあ

きようもん まっだい がくしやよ よ まなこ 留

りし経文なれば、末代の学者能く能く眼をとどむべし。

きようもん ほけきよう ねはんぎよう しようれつ

じつぽう

この経文は、ただ法華経・涅槃経の勝劣のみならず、十方

せかい いっさいきよう しょうれつ 知

きようもん

世界の一切経の勝劣をもしりぬべし。しかるを、経文に

まよ てんだい みようらく でんぎようだいし ご 料 簡 のち

こそ迷うとも、天台・妙楽・伝教大師の御りようけんの後

まなこ ひとびと 知

は、眼あらん人々はしりぬべきことぞかし。しかれども、

てんだいしゆう　ひと　じかく　ちしよう

きようもん　暗

天台宗の人たる慈覚・智証すら、なおこの経文にくらし。

況　よしゆう　ひとびと

いおうや余宗の人々をや。

ひとうたが　い　かんど　にほん　渡　きようぎよう

ある人疑つて云わく、漢土・日本にわたりたる経々に

ほけつきよう　すぐ　きよう　がっし　りゆうぐう　し

こそ法華経に勝れたる経はおわせずとも、月氏・竜宮・四

おう　にちがつ　とうりてん　とそつてん　ごうがしや　きようぎよう

王・日月・忉利天・都率天などには恒河沙の経々まし

なか　ほけきよう　すぐ　たも　おんきよう

ますなれば、その中に法華経に勝れさせ給う御経やまし

すらん。

こた　い　いち　まん　さつ　ていこ　い

答えて云わく、一をもつて万を察せよ。「庭戸を出でずし

てんか　知　ちにな　うがた　い

て天下をしる」とは、これなり。癡人が疑つて云わく「我われ

なんてん　み　とうざいほく　さんくう　み　か　さんぼう　そら

らは南天を見て東西北の三空を見ず。彼の三方の空にこの

にちりん　べつ　ひ　在　やま　へだ　けむり　た　み

日輪より別の日やましますらん。山を隔て煙の立つを見て

ひ　み　けむり　いちじよう　ひ

火を見ざれば、煙は一定なれども火にてやなかるらん。

言　もの　いつせんだい　ひと　知　しやうもう

かくのごとくいわん者は一闡提の人とするべし。生盲に

異

ことならず。

ほけきよう　ほつしほん　しやかによらい　こんく　じやうごん

法華經の法師品に、釈迦如来、金口の誠言をもつて

ごじゆうよねん　いつさいきよう　しやうれつ　さだ　のたま　わ　と

五十余年の一切經の勝劣を定めて云わく「我が説くところ

きやうてん　むりやうせんまんおく　すで　と　いま　と　まさ　と

ろの經典は無量千万億にして、已に説き、今説き、当に説

なか　ほけきよう　もつと

くべし。しかもその中において、この法華經は最もこれ

なんしんなんげ

とううんぬん

きようもん

しやかによらいいちぶつ

難信難解なり」等云々。この経文は、ただ釈迦如来一仏の

せつ

とうがくいげ

あお

しん

うえ

たほうぶつとうほう

説なりとも、等覚已下は仰いで信ずべき上、多宝仏東方よ

きた

しんじつ

しょうみよう

じつぼう

しよぶつあつ

り来つて「真実なり」と証明し、十方の諸仏集まつて

しゃかぶつ

おな

こうちようぜつ

ぼんでん

つ

たま

のち

おのおのくにぐに

釈迦仏と同じく広長舌を梵天に付け給いて後、各々国々へ

かえ

たま

いこんとう

さんじ

ごじゆうねん

じつぼうさんぜ

還らせ給いぬ。「已今当」の三字は、五十年ならびに十方三世

しよぶつ

おんきよういちじいつてん

残

ひ

の

ほけきよう

たい

の諸仏の御経一字一点ものこさず引き載せて法華経に対

と

たま

そうろう

じつぼう

しよぶつ

ざ

して説かせ給いて候なり。十方の諸仏この座にして

ごはんぎよう

くわ

たま

おのおの

じこく

かえ

たま

わ

御判形を加えさせ給い、各々また自国に還らせ給いて我が

でしとう

む

たま

ほけきよう

すぐ

おんきよう

弟子等に向かわせ給いて「法華経に勝れたる御経あり」と

と たま しよけ で しとうしんよう
説かせ給わば、その所化の弟子等信用すべしや。

われ み がつし りゆうぐう してん にちがつとう くでん
また、我は見ざれば、月氏・竜宮・四天・日月等の宮殿の

なか ほけきよう すぐ たま きよう うたが
中に法華經に勝れさせ給いたる經やおわしますすらんと疑

ぼんしゃく にちがつ してん りゆうおう ほけきよう おんざ
いをなす。されば、梵釈・日月・四天・竜王は法華經の御座

にちがつとう してん ほけきよう すぐ
にはなかりけるか。もし、日月等の諸天、「法華經に勝れた

おんきよう なんじ 知 おお だいおうわく
る御經まします。汝はしらず」と仰せあるならば、大誑惑

にちがつ にちれんせ い にちがつ こくう じゆう たま
の日月なるべし。日蓮責めて云わく「日月は虚空に住し給

われ だいち しよ だらく たま
えども、我らが大地に処するがごとくして墮落し給わざる

じようぼん ふもうごかい ちから ほけきよう すぐ
ことは、上品の不妄語戒の力ぞかし。法華經に勝れたる

おんきよう

おほ

だいもうご

おそ

御経ありと仰せある大妄語あるならば、恐らくは、いまだ

えこう

だいち うえ

落 そうら

むけん

壊劫にいたらざるに大地の上にどうとおち候わんか。無間

だいじよう

さいげ

けんてつ

留

大城の最下の堅鉄にあらずばとどまりがたからんか。

だいもうご

ひと

しゆゆ

くう

しよ

してんげ

めぐ

たも

大妄語の人は須臾も空に処して四天下を廻り給うべからず」

責

とせめたてまつるべし。

けごんしゆう

ちようかんとく

しんごんしゆう

ぜんむい

こんごうち

しかるを、華嚴宗の澄観等、真言宗の善無畏・金剛智・

ふくう

こうぼう

じかく

ちしようとう

だいち

さんぞうだいしとう

けごんきよう

不空、弘法・慈覚・智証等の大智の三蔵大師等、「華嚴経・

だいにちきようとう

ほけきよう

すぐ

た

たも

われ

ぶんざい

大日経等は法華経に勝れたり」と立て給うは、我らが分齊

およ

だいどうり

推

しよぶつ

には及ばぬことなれども、大道理のおすところは、あに諸仏

だいおんてき

だいば くぎやう

だいてん だいまん

の大怨敵にあらずや。提婆・瞿伽梨もものならず。大天・大慢、

ほか 求

ひとびと

しん

やから

恐

外にもとむべからず。かの人々を信ずる輩は、おそろし、

おそろし。

と

い

けごん

ちようかん

さんろん

かじよう

ほつそう

じおん

問うて云わく、華嚴の澄観、三論の嘉祥、法相の慈恩、

しんごん

ぜんむい ないしこうぼう

じかく

ちしようとう

ほとけ

かたき

宣

真言の善無畏乃至弘法・慈覚・智証等を仏の敵とのたもう

か。

こた

い

おお

なん

ぶつぼう

い

だいいち

答えて云わく、これ大いなる難なり。仏法に入つて第一の

だいじ

ぐげん

きようもん

み

ほけきよう

すぐ

大事なり。愚眼をもつて経文を見るには、法華経に勝れた

きよう

ひと

ひと

ほうぼう

る経ありといわん人は、たといいかなる人なりとも、謗法

まぬか

み

そうろう

きようもん

もう

は免れじと見えて候。しかるを、経文のごとく申すな

しよにんぶつてき

おそ

らば、いかでかこの諸人仏敵たらざるべき。もしまた恐れ

さ もう

いつさいきよう

しやうれつむな

をなして指し申さずば、一切経の勝劣空しかるべし。ま

ひとびと

おそ

すえ

ひとびと

ぶつてき

か

たこの人々を恐れて末の人々を仏敵といわんとすれば、彼

しゆうじゆう

すえ

ひとびと

い

ほけきよう

だいにちきよう

勝

の宗々の末の人々の云わく「法華経に大日経をまさりた

もう

われわたくし

はか

そし

おんぎ

りと申すは、我私の計らいにはあらず、祖師の御義なり。

かいぎよう

じは

ちえ

しやうれつ

み

じようげ

まな

戒行の持破、智慧の勝劣、身の上下はありとも、学ぶと

ほうもん

違

もう

か

ひとびと

失

ころの法門はたがうことなし」と申せば、彼の人々にとがな

にちれん

し

ひとびと

おそ

もう

し。また、日蓮これを知りながら人々を恐れて申さずば、「む

しんみよう うしな

おし かく

ぶつだ かんぎよう

しろ身命を喪うとも、教えを匿さざれ」の仏陀の諫曉を

もち もの

言

せけん 恐

用いぬ者となりぬ。いかんがせん。いわんとすれば世間おそ

とど

ほとけ

かんぎよう

脱

しんたい

ろし、止めんとすれば仏の諫曉のがれがたし。進退ここ

きわ

に谷まれり。

宣

ほけきよう

もん

い

きよう

むべなるかなや、法華經の文に云わく「しかもこの經は、

によらい

げん

いま

おんしつおお

めつど

のち

如来の現に在すすらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後を

い

いっさいせけん

あだおお

しん

がた

とううんぬん

や」。また云わく「一切世間に怨多くして信じ難し」等云々。

しゃかぶつ

まやぶにん

孕

たま

だいろくてん

釈迦仏を摩耶夫人はらませ給いたりければ、第六天の

まおう

まやぶにん

おんはら

通

み

われ

だいおんてき

ほけきよう

魔王、摩耶夫人の御腹をとおし見て、我らが大怨敵、法華經

もう りけん

こと じょう

さき

と申す利剣をはらみたり、事の成ぜぬ先にいかにしてか

うしな だいろくてん まおう おおい へん じょうぼんおうぐう い

失うべき。第六天の魔王、大医と變じて浄飯王宮に入り、

ごさんあんのん ろうやく たも そうろうだいい 旬 どく みさき

御産安穩の良薬を持ち候大医ありとののしりて、毒を后

進 しよしよう とき いし 降 にゆう どく 混

にまいらせつ。初生の時は石をふらし、乳に毒をまじえ、

しろ い たま くる どくじゃ へん どう 塞

城を出でさせ給いしには黒き毒蛇と變じて道にふさがり、

ないしだいば くぎやり はる りおう あじやせおうとう あくにん み い

乃至提婆・瞿伽利・波瑠璃王・阿闍世王等の悪人の身に入つ

たいせき 投 ほとけ おんみ ち 出

て、あるいは大石をなげて仏の御身より血をいだし、ある

しゃくし 殺 みで しとう ころ だいなん

いは釈子をころし、あるいは御弟子等を殺す。これらの大難

みな とお ほけきよう ぶつ せ せん と 誑

は皆、遠くは法華經を仏世尊に説かせまいらせじとたばか

りし「如来の現に在すすらな お怨嫉多し」の大難ぞかし。
によらい げん いま おんしつ おお だいなん

これらは遠き難なり。近き難には、舍利弗・目連・諸大菩薩
とお なん ちか なん しやり ほつ もくれん しよだい ぼさつ

等も四十余年が間は法華經の大怨敵の内ぞかし。
とう しじゅう よねん あいだ ほけき いう だい おんてき うち

「いわんや滅度して後をや」と申して、未来の世にはま
めつど のち もう みらい よ

たこの大難よりもすぐれておそろしき大難あるべしととか
だいなん 勝 恐 だいなん 説

れて候。仏だにも忍びがたかりける大難をば、凡夫はい
そうろう ほとけ しの だいなん ぼんぷ

かでか忍ぶべき。いおうや、在世より大いなる大難にてあ
しの 況 さいせ おお だいなん

るべかなり。いかなる大難か、提婆が長三丈広さ一丈
だいなん だいば たけさん じようひろ いちじよう

六尺の大石、阿闍世王の醉象にはすぐべきとおもえども、
ろくしやく たいせき あじやせ おう すいぞう 勝 思

かれす

そうろう

しようしつ

だいなん

たびたびあ

彼にも過ぐるべく候なれば、小失なくとも大難に度々値

ひと

めつこ

ほけきよう

ぎようじや

知

そうら

う人をこそ滅後の法華經の行者とはしり候わめ。

ふほうぞう

ひとびと

しえ

ぼさつ

ほとけ

おんつか

だいばぼさつ

付法蔵の人々は四依の菩薩、仏の御使いなり。提婆菩薩

げどう

ころ

ししそんじや

だんみらおう

こうべ

は

は外道に殺され、師子尊者は檀弥羅王に頭を刎ねられ、

ぶつだみった

りゆうじゅぼさつとう

あか

はた

しちねん

じゆうにねん指

通

仏陀密多・竜樹菩薩等は赤き幡を七年・十二年さしとおす。

めみようぼさつ

きんせんさんおく

代

にょいろんじ

思

死

馬鳴菩薩は金銭三億がかわりとなり、如意論師はおもいじ

し

しょうほういつせんねん

うち

にに死す。これらは正法一千年の内なり。

ぞうほう

い

ごひやくねん

ほとけ

めつこいつせんごひやくねん

もう

とき

像法に入つて五百年、仏の滅後一千五百年と申せし時、

かんど

いちにん

ちじん

はじ

ちぎ

のち

ちしやだいし

号

漢土に一人の智人あり。始めは智顗、後には智者大師とごう

ほけきよう ぎ

ぐつう

おも たま

す。法華經の義をありのままに弘通せんと思ひ給いしに、

てんだい いぜん ひやくせんまん ちしや 品々 いちだい はん

天台已前の百千万の智者しなじなに一代を判ぜしかども、

せん じゅうりゆう なんさんほくしち じゅうりゆう

詮じて十流となりぬ。いわゆる南三北七なり。十流あ

いちりゆう

さい

なんさん

なか

りしかども、一流をもつて最とせり。いわゆる南三の中の

だいさん こうたくじ ほううんほつし

第三の光宅寺の法雲法師これなり。

ひと いちだい ぶつきよう いつ

分

いつ

なか

この人は一代の仏教を五つにわかつ。その五つの中に

さんきよう 選出

けこんぎよう

ねはんぎよう

ほけきよう

三經をえらびいだす。いわゆる華嚴經・涅槃經・法華經な

いっさいきよう なか

けこんぎようだいいち だいおう

ねはんぎようだいに

り。一切經の中には華嚴經第一、大王のごとし。涅槃經第二、

せつしよう かんぱく だいさんほけきよう くぎようとう

摂政・関白のごとし。第三法華經は公卿等のごとし。これ

いげ ばんみん

ひと もと ちえ

うえ

より已下は万民のごとし。この人は本より智慧かしこき上、

えかん えげん そうじゅう えじ

もう だいちしや なら った

慧観・慧嚴・僧柔・慧次など申せし大智者より習い伝え

たま なんぼく しよし ぎ 責 破 さんりん

給えるのみならず、南北の諸師の義をせめやぶり、山林に

交 ほけきょう ねはんぎょう けごんぎょう く 積 うえ りよう

まじわりて法華経・涅槃経・華嚴経の功をつもりし上、梁

ぶていめ い だいいり うち てら た こうたくじ 名

の武帝召し出だして内裏の内に寺を立て、光宅寺となづけ

ほっし 崇 たも

てこの法師をあがめ給う。

ほけきょう 講 てん はな下 ざいせ

法華経をこうぜしかば、天より花ふること在世のごとし。

てんかんごねん だいかんぼつ ほううんほっし しよう たてまつ

天監五年に大旱魃ありしかば、この法雲法師を請じ奉つ

ほけきょう こう やくそうゆほん ごう ふとう

て法華経を講ぜさせまいらせしに、薬草喻品の「其雨普等、

しほうくげ

あめ

ひと

しほう

くだ

四方俱下（その雨はあまねく等しくして、四方にともに下

もう

にく

こう

たま

とき

てん

かんうふ

る」と申す二句を講ぜさせ給いし時、天より甘雨下りたり

てんし

ぎよかん

げん

そうしよう

しかば、天子、御感のあまりに現に僧正になしまいらせて、

しよてん

たいしやく

仕

ばんみん

こくおう

畏

われ

諸天の帝釈につかえ、万民の国王をおそるるがごとく我と

仕

たま

うえ

ひとゆめ

ひと

かこ

とうみようぶつ

つかえ給いし上、ある人夢みらく、この人は過去の灯明仏

とき

ほけきよう

講

ひと

の時より法華経をこうぜる人なり。

ほけきよう

しよしかん

しよ

い

きよう

法華経の疏四卷あり。この疏に云わく「この経いまだ

じゃくねん

碩然ならず」。また云わく「異の方便」等云々。正しく、

ほけきよう

ぶつり

極

きよう

か

そうろう

法華経はいまだ仏理をきわめざる経と書かれて候。この

ひと おんぎ ぶつ い あいかな たま てん はな ふ あめ

人の御義、仏意に相叶い給いければこそ、天より花も下り雨

そちら

そちら

もふり候いけらめ。かかるいみじきことにて候いしかば、

かんど ひと

ほけきよう

けこんぎよう

ねはんぎよう

おと

漢土の人、さては法華経は華嚴経・涅槃経には劣るにてこ

おも

うえ

しんら

ひやくさい

こうらい

にほん

そあるなれと思ひし上、新羅・百濟・高麗・日本までこの

しよ 広

だいたい いちどう

ぎ

そちら

ほううん ほつし

疏ひろまりて、大体一同の義にて候いしに、法雲法師

ごしきよ

幾

りよう

まつ

ちん

はじ

御死去ありていくばくならざるに、梁の末、陳の始めに

ちぎ ほつし

もう

しょうそうしゅつたい

智顗法師と申す小僧出来せり。

なんがくだいし

もう

ひと

みでし

南岳大師と申せし人の御弟子なりしかども、師の義も

ふしん

いっさいきようぞう

い

たびたびご

覧

不審にありけるかのゆえに、一切経蔵に入つて度々御らん

けごんぎよう

ねはんぎよう

ほけきよう

さんきよう

せん

出

ありしに、華嚴経・涅槃経・法華経の三経に詮じいだし、

さんきよう

なか

こと

けごんぎよう

こう

たま

べつ

らいもん

つく

この三経の中に殊に華嚴経を講じ給いき。別して礼文を造

ひびく

たま

せけん

ひと

思

ひと

つて日々に功をなし給いしかば、世間の人おもわく、この人

けごんぎよう

だいいち

思

み

ほううんほつし

も華嚴経を第一とおぼすかと見えしほどに、法雲法師が

いっさいきよう

なか

けごんだいいち

ねはんだいに

ほつけだいさん

た

一切経の中に「華嚴第一、涅槃第二、法華第三」と立てた

余

ふしん

ゆえ

けごんぎよう

ご

覧

るがあまりに不審なりける故に、ことに華嚴経を御らんあ

りけるなり。

いっさいきよう

なか

ほつけだいいち

ねはんだいに

けごんだいさん

かくて、一切経の中に「法華第一、涅槃第二、華嚴第三」

みさだ

たま

歎

たも

様

によらい

しようぎよう

と見定めさせ給いてなげき給うようは、「如来の聖教は

かんど

渡

ひと

りやく

いっさい

漢土にわたれども、人を利益することなし。かえりて一切

しゅじよう

あくどう

みちび

にんし

あやま

れい

衆生を悪道に導くこと、人師の誤りによれり。例せば、

くに

おき

ひと

ひがし

にし

言

てん

ち

言

出

国の長とある人、東を西といい、天を地といいいだしぬれ

ばんみん

こころ得

のち

卑

ものしゅつたい

ば、万民はかくのごとくに心うべし。後にいやしき者出来

なんだち

にし

ひがし

なんだち

てん

ち

言

用

して、『汝等が西は東、汝等が天は地なり』といわば、もち

うえ

わ

おき

こころ

かな

いま

ひと

うることなき上、我が長の心に叶わんがために、今の人を

罵

打

思

のりうちなんどすべし。いかんがせん」とはおぼせしかど

黙

こうたくじ

ほううんほつし

ほうぼう

も、さてもだすべきにあらねば、「光宅寺の法雲法師は謗法

じごく

お

罰

たも

とき

なんぼく

によつて地獄に堕ちぬ」とののしらせ給う。その時、南北の

しよし

蜂

ほうき

鳥

うごう

諸師、はちのごとく蜂起し、からすのごとく鳥合せり。

ちぎほつし

こうへ

破

くに

追

もう

智顗法師をば、頭をわるべきか国をおうべきかなんぞ申

ちんしゅ

なんぼく

すうにん

め

あ

せしほどに、陳主これをきこしめして、南北の数人に召し合

われ

れつぎ

聞

たま

ほううんほつし

でしとう

え

わせて、我と列座してきかせ給いき。法雲法師が弟子等、慧

よう

はっさい

えこう

えごう

もう

そうじよう

そうずいじよう

ひとびと

栄・法歳・慧曠・慧暉なんぞ申せし僧正・僧都已上の人々

ひやくよにん

おのおのあつく

さき

まゆ

上

まなこ

怒

百余人なり。各々悪口を先とし、眉をあげ眼をいからかし、

て

ひようし

叩

ちぎほつし

まつぎ

ざ

手をあげ拍子をたたく。しかれども、智顗法師は末座に坐し

いろ

へん

ことば

あやま

いぎ

静

しよそう

ことば

て、色を変ぜず言を誤らず、威儀しずかにして、諸僧の言

いちいち

ぎよう

取

こと

責

返

押

返

なん

を一々に牒をとり、言ごとにせめかえす。おしかえして難

い

じて云わく「そもそも法雲法師の御義に『第一華嚴、第二

ねはん だいさんほつけ

た

たま

しょうもん

きよう

涅槃、第二法華』と立てさせ給いける証文はいずれの経ぞ。

たし

あき

しょうもん

い

たま

責

慥かに明らかなる証文を出ださせ給え」とせめしかば、

おのおのこうべ

俯

いろ

うしな

いちごん

へんじ

各々頭をうつぶせ、色を失つて一言の返事なし。

かさ

責

い

むりようぎきよう

まさ

つぎ

ほうどう

重ねてせめて云わく「無量義経に正しく『次に方等

じゆうにぶきよう

まかはんにや

けごんかいくう

と

とううんぬん

ほとけ

われ

十二部経・摩訶般若・華嚴海空を説いて』等云々。仏、我と

けごんぎよう

な

呼

上

むりようぎきよう

たい

しんじつ

華嚴経の名をよびあげて、無量義経に対して『いまだ真実を

あらわ

う

け

たも

ほけきよう

おと

そうろうむりようぎきよう

顕さず』と打ち消し給う。法華経に劣つて候 無量義経に、

けごんぎよう

責

そうろう

こころ得

たま

けごんぎよう

華嚴経はせめられて候。いかに心えさせ給いて華嚴経を

いちだいいい

そうら

おのおのおんし

おん 方

人

ば一代第一とは候いけるぞ。

各々御師の御かとうどせんと

思

きようもん

破

すぐ

きようもん

と

おぼさば、この経文をやぶりて、これに勝れたる経文を取

い

おんし

おんぎ

たす

たま

責

り出だして、御師の御義を助け給え」とせめたり。

ねはんぎよう

ほけきよう

すぐ

そうら

また、「涅槃経を法華経に勝ると候いけるは、いかなる

きようもん

ねはんぎよう

だいじゅうし

けこん

あごん

ほうどう

はんにや

挙

経文ぞ。涅槃経の第十四には華嚴・阿含・方等・般若をあ

ねはんぎよう

たい

しょうれつ

と

そうら

げて、涅槃経に対して勝劣は説かれて候えども、まつた

ほけきよう

ねはんぎよう

しょうれつ

見

つぎかみ

だいく

かん

く法華経と涅槃経との勝劣はみえず。次上の第九の巻に

ほけきよう

ねはんぎよう

しょうれつふんみよう

きようもん

い

法華経と涅槃経との勝劣分明なり。いわゆる、経文に云

きよう

よ

い

ないしほつけ

なか

はっせん

しょうもん

わく『この経、世に出ずるは乃至法華の中の八千の声聞の

きべつ う

え だいかじつ じよう

しゅうしゅう

記別を受くることを得て大菓実を成ずるがごとし。秋収

とうぞう

しよさな

とううんぬん

きようもんあき

冬蔵して、さらに所作無きがごとし』等云々。経文明らか

しよきよう

しゆんか

と

たま

ねはんぎよう

ほけきよう

かじつ

に諸経をば春夏と説かせ給い、涅槃経と法華経とをば菓実

くらい

と

そうら

ほけきよう

しゅうしゅうとうぞう

の位とは説かれて候えども、法華経をば秋収冬蔵の

かいかじつ

くらい

ねはんぎよう

あき すえ

ふゆ はじ

くんじゅう

くらい

大菓実の位、涅槃経をば秋の末・冬の始めの拈拾の位と

さだ たま

きようもん

まさ

ほけきよう

わ みおと

定め給いぬ。この经文、正しく法華経には我が身劣ると

しょうぶく

たま

ほけきよう

もん

すで

と

いと

まさ

承伏し給いぬ。法華経の文には『已に説き、今説き、当に

と

もう

ほけきよう

さき

なら

きようぎよう

すぐ

説くべし』と申して、この法華経は前と並びとの経々に勝

れたるのみならず、後に説かん経々にも勝るべしと仏定

のち

と

きようぎよう

すぐ

ほとけさだ

たも

きようしゆしやくそん

さだ たま

うたが

め給う。すでに教主釈尊かく定め給いぬれば疑うべきに

わ めつご

うたが

とうほう

あらねども、我が滅後はいかんと疑いおぼして東方

ほうじようせかい

たほうぶつ

しょうにん

た

たま

たほうぶつだいち

宝浄世界の多宝仏を証人に立て給いしかば、多宝仏大地

踊

い

みようほけきよう

みな

しんじつ

しょう

よりおどり出でて『妙法華経は、皆これ真実なり』と証し、

じつぼうふんじん

しよぶつかさ

集

たま

こうちようぜつ

だいぼんでん

十方分身の諸仏重ねてあつまらせ給い、広長舌を大梵天に

っ

きようしゆしやくそん

っ

たも

のち

たほうぶつ

付け、また教主釈尊も付け給う。しかして後、多宝仏は

ほうじようせかい

帰

じつぼう

しよぶつおのおのほんど

帰

たま

宝浄世界へかえり、十方の諸仏各々本土にかえらせ給いて

のち

たほう

ふんじん

ほとけ

きようしゆしやくそんねはんぎよう

後、多宝・分身の仏もおおせざらん、教主釈尊涅槃経

説

ほけきよう

すぐ

おお

みでしとう

しん

をといて『法華経に勝る』と仰せあらば、御弟子等は信ぜ

たも

責

にちがつ

だいこうみよう

しゅら

まなこ

させ給うべしや」とせめしかば、日月の太光明の修羅の眼

て

かんおう

つるぎ

しょう

こうべ

懸

を照らすのごとく、漢王の剣の諸侯の頸にかかりしがご

りようげん

閉

いっとう

た

てんだいだいし

みけしき

とく、両眼をとじ、一頭を低れたり。天台大師の御気色は、

ししおう

こと

さき

ほ

たか

わし

はと

きじ

責

師子王の狐兔の前に吼えたるがごとし。鷹・鷲の鳩・雉をせ

似

めたるにいたり。

ほけきよう

けごんぎよう

ねはんぎよう

かくのごとくありしかば、さては法華経は華嚴経・涅槃経

勝

しんたんいつこく

るふ

にもすぐれてありけりと震旦一国に流布するのみならず、

ごてんじく

き

がつし

だいいしろう

しよろん

ちしや

かえりて五天竺までも聞こえ、「月氏の大小の諸論も智者

だいし

おんぎ

すぐ

きようしゆしやくそんりようどしゆつげん

大師の御義には勝れず。教主釈尊両度出現しますか。

ぶつきように ど

顕

讃

たま

仏教二度あらわれぬ」とほめられ給いしなり。

のち てんだいだいし ごにゆうめつ

ちん ずい よ か

その後、天台大師も御入滅なりぬ。陳・隋の世も代わつ

とう よ

しょうあんだいいし ごにゆうめつ

てんだい ぶつぼう

て唐の世となりぬ。章安大師も御入滅なりぬ。天台の仏法

漸 なら う

とう たいそう ぎよう げんじようさんぞう

ようやく習い失せしほどに、唐の太宗の御宇に玄奘三蔵と

ひと じようがんさんねん はじ がっし い どうじゅうくねん 帰

いいし人、貞観三年に始めて月氏に入り同十九年にかえり

がっし ぶつぼうたず っ ほつそうしゅう もう しゅう

しが、月氏の仏法尋ね尽くして法相宗と申す宗をわたす。

しゅう てんだいしゅう すいか てんだい ごらん

この宗は天台宗と水火なり。しかるに、天台の御覧な

じんみつきよう ゆがろん ゆいしきろんとう ほけきよう

かりし深密経・瑜伽論・唯識論等をわたして「法華経は

いっさいきよう すぐ じんみつきよう おと

一切経には勝れたれども、深密経には劣る」という。し

てんだい ごらん

てんだい まつがくとう ちえ うす

かるを、天台は御覧なかりしかば、天台の末学等は智慧の薄

思

たいそう けんおう げんじよう

きかのゆえに、さもやとおもう。また太宗、賢王なり。玄奘

ごきえ 浅

の御帰依あさからず。いうべきことありしかども、いつも

とき

い

恐

もう

ひと

ほけきよう

う

のことなれば、時の威をおそれ申す人なし。法華経を打ち

返

さんじようしんじつ

いちじようほうべん

ごしようかくべつ

もう

かえして「三乗真実・一乘方便・五性各別」と申せしこ

こころ 憂

てんじく

渡

がつし

とは、心うかりしことなり。天竺よりはわたれども、月氏

げどう

かんど

ほけきよう

ほうべん

じんみつきよう

しんじつ

の外道が漢土にわたれるか。「法華経は方便、深密経は真実」

言

しゃか

たほう

じつぽう

しよぶつ

じようごん

といいしかば、釈迦・多宝・十方の諸仏の誠言もかえりて

むな

げんじよう

じおん

とき

しようじん

ほとけ

虚しくなり、玄奘・慈恩こそ時の生身の仏にてはありし

か。

のち そくてんこうごう ぎよう さき てんだいだいし 責

その後、則天皇后の御宇に、前に天台大師にせめられし

けこんぎよう かさ しんやく けこんぎよう 前

華嚴經にまた重ねて新訳の華嚴經わたりしかば、さきの

憤 果 しんやく けこん てんだい

いきどおりをはたさんがために、新訳の華嚴をもつて天台

くやく けこんぎよう たす けこんしゅう もう しゅう

にせめられし旧訳の華嚴經を扶けて、華嚴宗と申す宗を

ほうぞうほつし もう ひとた しゅう けこんぎよう こんぽん

法蔵法師と申す人立てぬ。この宗は、華嚴經をば「根本

ほうりん ほけきよう しまつほうりん もう なんぼく いちけこん

法輪」、法華經をば「枝末法輪」と申すなり。南北は「一華嚴、

にねはん さんほつけ てんだいだいし いちほつけ にねはん さんけこん

二涅槃、三法華」、天台大師は「一法華、二涅槃、三華嚴」。

いま けこんしゅう いちけこん にほつけ さんねはん とううんぬん

今の華嚴宗は「一華嚴、二法華、三涅槃」等云々。

のち

げんそうこうてい

ぎょう

てんじく

ぜんむいさんぞう

その後、玄宗皇帝の御宇に、天竺より善無畏三蔵、

だいにちきよう

そしつじきよう

こんごうちさんぞう

こんごうちようきよう

大日経・蘇悉地経をわたす。金剛智三蔵、金剛頂経をわ

こんごうちさんぞう

でし

ふくうさんぞう

さんにん

たす。また金剛智三蔵の弟子あり、不空三蔵なり。この三人

がつし

ひと

すじよう

こうき

うえ

ひと

かんど

そう

似

は、月氏の人、種姓も高貴なる上、人がらも漢土の僧ににず、

ほうもん

何

知

ごかん

いま

至

いん

法門もなにとはしらず後漢より今にいたるまでなかりし印

しんげん

じ

相 添

てんし

と真言という事をあいそいてゆゆしかりしかば、天子

頭

傾

ばんみんたなごころ

合

こうべをかたぶけ、万民掌をあわす。

ひとびと

ぎ

けごん

じんみつ

はんにや

ねはん

ほけきよう

この人々の義にいわく「華嚴・深密・般若・涅槃・法華経

とう

しようれつ

けんきよう

うち

しゃかによらい

せつ

ぶん

いま

等の勝劣は顕教の内、釈迦如来の説の分なり。今の

だいにちきようとう だいにちほうおう ちよくげん

か きようぎよう たみ ばんげん

大日経等は大日法王の勅言なり。彼の経々は民の万言、

きよう てんし いちげん

けこんぎよう ねはんぎようとう だいにちきよう

この経は天子の一言なり。華嚴経・涅槃経等は大日経に

はし た およ

ほけきよう だいにちきよう

は梯を立てても及ばず、ただ法華経ばかりこそ大日経には

そうじ きよう

か きよう しゃかによらい せつ たみ

相似の経なれ。されども、彼の経は釈迦如来の説、民の

せいげん きよう てんし せいげん

ことば に ひと

正言。この経は天子の正言なり。言は似たれども、人が

うんでい たと じよくすい つき せいすい つき

ら雲泥なり。譬えば、濁水の月と清水の月のごとし。月の

かげ おな みず せいだく もう

影は同じけれども、水に清濁あり」なんと申しければ、こ

よしたず あらわ ひと しょうゆうみなお ふ しんこんしゆう

の由尋ね顕す人もなし。諸宗皆落ち伏して真言宗に

傾 ぜんむい こんごうちしきよ のち ふくうさんぞう がっし

かたぶきぬ。善無畏・金剛智死去の後、不空三蔵また月氏に

帰

ぼだいしんろん

もう

ろん

渡

しんごんしゅうさか

かえりて菩提心論と申す論をわたし、いよいよ真言宗盛り
なりけり。

みょうらくだいし

ひと

てんだいだいし

ただし、妙楽大師という人あり。天台大師よりは

にひやくよねん

のち

ちえ

賢

ひと

てんだい

しよしゃく

二百余年の後なれども、智慧かしこき人にて天台の所釈を

みあき

てんだい

しゃく

こころ

のち

渡

見明らめてありしかば、「天台の釈の心は、後にわたれる

じんみつきよう

ほつそうしゅう

はじ

かんど

た

けごんしゅう

深密経・法相宗、また始めて漢土に立てたる華嚴宗、

だいにちきよう

しんごんしゅう

ほけきよう

すぐ

たま

大日経・真言宗にも法華経は勝れさせ給いたりけるを、

ち 及

ひと

おそ

あるいは智のおよばざるか、あるいは人を畏るるか、ある

とき

おうい

怖

ゆえ

言

いは時の王威をおずるかの故にいわざりけるか。こうてあ

てんだい しょうぎ

るならば、天台の正義すでに失せなん。また陳・隋已前の

なんぼく じゃぎ

思

さんじつかん まつもん つく

南北が邪義にも勝れたり」とおぼして、三十卷の末文を造り

たも ぐけつ しゃくせん しよき

給う。いわゆる弘決・釈籤・疏記これなり。この三十卷の

ふみ ほんしよ かさ

削

弱

助

文は、本書の重なれるをけずりよわきをたすくるのみなら

てんだいだいし おんとき

おんせ

逃

ず、天台大師の御時なかりしかば御責めにものがれてある

ほつそうしゅう けごんしゅう しんごんしゅう

いちじ

取

拉

ようなる法相宗と華嚴宗と真言宗とを、一時にとりひし

しよ

がれたる書なり。

にほんこく

にんのうだいさんじゅうだいきんめいてんのう

ぎょうじゅうさんねん

また日本国には、人王第三十代欽明天皇の御宇十三年

みずのえさるじゅうがつじゅうさんにち

ひやくさいこく

いつさいきよう

しゃかぶつ

ぞう

壬申十月十三日に、百済国より一切経・釈迦仏の像を

渡　　ようめいてんのう　　ぎよう　　しようとくたいし　　ぶつぼう

わたす。また用明天皇の御宇に、聖徳太子、仏法をよみは

わけのいもこ　　もう　　しんか　　かんど　　遣　　せんしよう

じめ、和気妹子と申す臣下を漢土につかわして、先生の

しよじ　　いつかん　　ほけきよう　　たま　　じきよう　　さだ　　のち

所持の一卷の法華経をとりよせ給いて持経と定め、その後、

にんのうだいさんじゅうしちだい　　こうとくてんのう　　ぎよう　　さんろんしゅう　　けごんしゅう

人王第三十七代に孝徳天皇の御宇に三論宗・華嚴宗・

ほつそうしゅう　　くしやしゅう　　じようじつしゅう　　渡　　にんのうしじゅうごだい　　しようむてんのう

法相宗・倶舎宗・成実宗わたる。人王四十五代に聖武天皇

ぎよう　　りつしゅう　　いじようろくしゅう　　こうとく　　にんのう

の御宇に律宗わたる。已上六宗なり。孝徳より人王

だいごじゅうだい　　かんむてんのう　　じゅうしだい　　いっぴやくにじゅうよねん

第五十代の桓武天皇にいたるまでは十四代一百二十余年が

あいだ　　てんだい　　しんごん　　にしゅう

間は、天台・真言の二宗なし。

かんむ　　ぎよう　　さいちよう　　もう　　しようそう　　やましなでら　　ぎようひよう

桓武の御宇に最澄と申す小僧あり。山階寺の行表

そうじよう

みでし

ほつそうしゆう

はじ

ろくしゆう

なら

極

僧正の御弟子なり。法相宗を始めとして六宗を習いきわ

ぶつぼう

きわ

覚

めぬ。しかれども、仏法いまだ極めたりともおぼえざりし

けこんしゆう

ほうぞうほつし

つく

きしんろん

しよ

みたま

に、華嚴宗の法蔵法師が造りたる起信論の疏を見給うに、

てんだいだいし

しゃく

ひ

載

しよ

しさい

天台大師の釈を引きのせたり。この疏こそ子細ありげなれ。

くに

わた

ふしん

この国に渡りたるか、またいまだわたらざるかと不審あり

ひと

問

ひと

い

だいとう

しほどに、ある人にといしかば、その人の云わく「大唐の

ようしゅうりゅうこうじ

そう

がんじんわじよう

てんだい

まつがく

どうせんりつし

でし

揚州竜興寺の僧・鑑真和尚は、天台の末学、道暹律師の弟子。

たんぼう

すえ

にほんこく

たま

しょうじよう

かい

ぐつう

天宝の末に日本国にわたり給いて小乗の戒を弘通せさせ

たま

てんだい

おんしゃくも

きた

弘

たま

給いしかども、天台の御釈持ち来りながらひろめ給わず。

にんのうだいしじゅうごだいしようにむてんのう

ぎよう

語

しよ み

人王第四十五代聖武天皇の御宇なり」とかたる。その書を見

もう

と い

み

いっぺん

んと申されしかば、取り出だして見せまいらせしかば、一返

ご 覧

しように

よ

覚

しよ

ろくしゅう

御らんありて生死の酔いをさましつ。この書をもつて六宗

こころ

たず

明

いちいち

じゃけん

顕

の心を尋ねあきらめしかば、一々に邪見なることあらわれ

がん

おこ

い

にほんこく

ひと

みなほうぼう

もの

ぬ。たちまちに願を發して云わく「日本国の人、皆謗法の者

だんおつ

てんかいちじようみだ

思

ろくしゅう

なん

の檀越たるか。天下一定乱れなんず」とおぼして六宗を難

しちだいじ

ろくしゅう

せきがくほうき

きようじゅううごう

ぜられしかば、七大寺・六宗の碩学蜂起して、京中烏合

てんか

騷

しちだいじ

ろくしゅう

しよにんとう

あくしんごうじよう

し、天下みなさわぐ。七大寺・六宗の諸人等、悪心強盛な

り。

えんりやくにじゅういちねんしょうがつじゅうくにち

てんのう

しかるを、去ぬる延暦二十一年正月十九日に天皇

たかおでら ぎょうこう

しちじ

けんとくじゅうしにん

ぜんぎ

しょうゆう

高雄寺に行幸あつて、七寺の碩徳十四人、善議・勝猷・

ほうき ちようにん

けんぎよく

あんぷく

ごんぞう

しゅえん

じこう

げんよう

さいこう

奉基・寵忍・賢玉・安福・勤操・修円・慈誥・玄耀・歳光・

どうしょう こうしょう

かんびんとうじゅううよにん

め

あ

けごん

さんろん

道証・光証・觀敏等十有余人を召し合わす。華嚴・三論・

ほつそうとう

ひとびと

おのおのわ

しゅう

がんそ

ぎ

違

さいちよう

法相等の人々、各々我が宗の元祖が義にたがわず。最澄

しょうにん

ろくしゅう

ひとびと

しよりゅういちいち

ちよう

と

ほんきよう

上人は六宗の人々の所立一々に牒を取つて、本經・

ほんろん

しよきよう

しよろん

さ

あ

責

いちごん

本論ならびに諸經・諸論に指し合わせてせめしかば、一言

こた

くち

はな

てんのう

驚

たま

も答えず、口をして鼻のごとくになりぬ。天皇おどろき給い

いさい

おん 尋

かさ

ちよくせん

くだ

じゅうしにん

て委細に御たずねありて、重ねて勅宣を下して十四人をせ

たま

しょうぶく

しゃひよう

たてまつ

しよ

い

め給いしかば、承伏の謝表を奉りたり。その書に云わ

しちか

だいじ

ろくしゆう

がくしようないしはじ

しごく

さと

とう

く「七箇の大寺、六宗の学匠乃至初めて至極を悟る」等

うんぬん

い

しょうとく

ぐけ

このかた

いま

にひやくよねん

云々。また云わく「聖徳の弘化より以降、今に二百余年の

あいだ

こう

きようろん

かずおお

ひし

り

あらそ

間、講ずるところの経論その数多し。彼此、理を争えど

うたが

と

さいみよう

えんしゆう

も、その疑いまだ解けず。しかもこの最妙の円宗なお

せんよう

とううんぬん

い

さんろん

ほつそう

きゆうねん

いまだ闡揚せず」等云々。また云わく「三論・法相の久年

あらそ

かんえん

こおり

と

しょうぜん

すで

あき

の諍い渙焉として氷のごとく解け、照然として既に明ら

うんむ

ひら

さんこう

み

うんぬん

かなること、なお雲霧を披いて三光を見るがごとし」云々。

さいちようかしよう

じゆうしにん

ぎ

はん

い

おのおのいちじく

こう

最澄和尚、十四人が義を判じて云わく「各一軸を講ず。

ほつく しんがく ふ ひんしゅ さんじよう みち はいかい ぎき
法鼓を深壑に振るうに、賓主は三乗の路に徘徊し、義旗を

こうほう と ちようよう さんう けつ ざいは

高峰に飛ばすに、長幼は三有の結を摧破す。なおいまだ

りやつこう てつ あらた びやくこ もんげ こん よ しょほつ

歴劫の轍を改めず、白牛を門外に混ず。あに善く初発の

くらい のぼ あだ たくない さと とううんぬん ひろよ まつなににん

位に昇り、阿茶を宅内に悟らんや」等云々。広世・真綱二人

しんかい りようぜん みようほう ながく き そうじ みようこ

の臣下云わく「靈山の妙法を南岳に聞き、総持の妙悟を

てんだい ひら いちじよう ぐんたい いた さんたい みけん かな とう

天台に闢く。一乗の権滞を慨み三諦の末頭を悲しむ」等

うんぬん じゅうしにん い ぜんぎとう ひ きゆううん あ

云々。また十四人云わく「善議等、牽かれて休運に逢い、

すなわ きし けみ ふか ご ぜん なん せいせい

乃ち奇詞を閲す。深く期するにあらざるよりは、何ぞ聖世

たく とううんぬん

に託せんや」等云々。

じゅうしにん

けごんしゅう

ほうぞう

しんじょう

さんろんしゅう

かじょう

かんろく

この十四人は、華嚴宗の法蔵・審祥、三論宗の嘉祥・観勒、

ほつそうしゅう

じおん

どうしゅう

りつしゅう

どうせん

がんじんとく

かんど

にほん

法相宗の慈恩・道昭、律宗の道宣・鑑真等の漢土・日本

がんそとう

ほうもん

かめ

替

みず

いち

の元祖等の法門、瓶はかわれども水は一なり。しかるに

じゅうしにん

か

じゃぎ

捨

でんぎよう

ほけきよう

きぶく

うえ

十四人、彼の邪義をすてて伝教の法華經に帰伏しぬる上は、

たれ

まつだい

ひと

けごん

はんによ

じんみつきようきよう

ほけきよう

ちようか

誰の末代の人か「華嚴・般若・深密經等は法華經に超過せ

もう

しようじよう

さんしゅう

か

ひとびと

しよがく

り」と申すべきや。小乗の三宗はまた彼の人々の所学な

だいじよう

さんしゅうやぶ

うえ

さた

り。大乘の三宗破れぬる上は、沙汰のかぎりにあらず。

いま

しさい

し

もの

ろくしゅう

やぶ

しかるを、今に子細を知らざる者、六宗はいまだ破られず

思

たと

もうじん

てん

にちがつ

み

ろうじん

いかずち

とおもえり。譬えば、盲人が天の日月を見ず、聾人が雷の

おと 聞

てん にちがつ

そら こえ

思

音をきかざるがゆえに、天には日月なし、空に声なしとおも

うがごとし。

しんこんしゅう もう

にほんにんのうだいしじゅうしだい

もう

げんしゅう

真言宗と申すは、日本人王第四十四代と申せし元正

てんのう ぎょう

ぜんむいさんぞう

だいにちきよう

渡

ぐつう

天皇の御宇に、善無畏三蔵、大日経をわたして弘通せずし

かんど 帰

げんぼうとう

だいにちきよう

ぎしやくじゅうしかん

て漢土へかえる。また玄昉等、大日経の義釈十四卷をわた

とうだいじ

とくせいだいとく

でんぎようだいしご

す。また東大寺の得清大徳わたす。これらを伝教大師御

覧

だいにちきよう

ほけきよう

しょうれつ

らんありてありしかども、大日経・法華経の勝劣いかん

思

ふしん

ゆえ

い

がとおぼしけるほどに、かたがた不審ありし故、去ぬる

えんりやくにじゅうさんねんしちがつごにっとう

さいみようじ

どうずいかしろう

ぶつろうじ

延暦二十三年七月御入唐。西明寺の道邃和尚、仏隴寺の

ぎようまんとあ たてまつ しかんえんどん だいかい えんじゆ れいかんじ

行満等に値い 奉 っ て止観円頓の大戒を伝受し、靈感寺の

じゆんぎようわじよう あ たてまつ しんごん そうでん おな えんりやく

順 曉和尚に値い 奉 っ て真言を相伝し、同じき延暦

にじゆうしねんろくがつ きちよう かんむてんのう ごたいめん せんじ くだ

二十四年六月に帰朝して桓武天皇に御対面。宣旨を下して

ろくしゆう がくしよう しかん しんごん なら おな しちだいじ 置

六宗の学匠に止観・真言を習わしめ、同じく七大寺におか

れぬ。

しんごん しかん にしゆう しようれつ かんど おお しさい

真言・止観の二宗の勝劣は漢土に多くの子細あれども、

だいにちきよう ぎしやく りどうじしよう 書

また大日経の義釈には「理同事勝」とかきたれども、伝教

だいし ぜんむいさんぞう 誤 だいにちきよう ほけきよう

大師は「善無畏三蔵のあやまりなり。大日経は法華経には

おと し はっしゆう たま

劣りたり」と知ろしめして、八宗とはせさせ給わず、

しんごんしゅう

な

削

ほつけしゅう

うち

い

しちしゅう

真言宗の名をけずりて法華宗の内に入れ七宗となし、

だいにちきよう

ほつけてんだいしゅう

ぼうえ

きよう

けごん

だいぼん

大日経をば法華天台宗の傍依の経となして、華嚴・大品

はんによ

ねほんとう

れい

般若・涅槃等の例とせり。

だいじ

えんどん

だいじようべつじゆかい

だいかいだん

わ

くに

しかれども、大事の円頓の大乗別受戒の大戒壇を我が国

た

た

じようろん

煩

に立ちよう立てじの諍論がわずらわしきによつてや、

しんごん

てんだいにしゅう

しようれつ

でし

ふんみよう

教

たま

真言・天台二宗の勝劣は弟子にも分明におしえ給わざり

えびようしゅう

もう

ふみ

まさ

しんごんしゅう

ほつけ

けるか。ただし、依憑集と申す文に、正しく真言宗は法華

てんだいしゅう

しようぎ

ぬす

だいにちきよう

い

りどう

天台宗の正義を偷みとりて大日経に入れて理同とせり。

か

しゅう

てんだいしゅう

お

しゅう

況

されば、彼の宗は天台宗に落ちたる宗なり。いおうや、

ふくうさんどう

ぜんむい

こんごうちにゆうめつ

のち

がっし

い

不空三蔵は、善無畏・金剛智入滅の後、月氏に入つてあり

りゆうちぼさつ

あ

たてまつ

とき

がっし

ぶっい

明

しに、竜智菩薩に値い奉りし時、「月氏には仏意をあきら

ろんしやく

かんど

てんだい

ひと

しやく

じゃせい

めたる論釈なし。漢土に天台という人の釈こそ邪正を

簡

へんえん

明

もん

そうろう

えらび偏円をあきらめたる文にては候なれ。あなかしこ、

がっし

わた

たま

懇

詔

あなかしこ。月氏へ渡し給え」とねんごろにあつらえしこ

ふくう

でし

がんこう

もの

みようらくだいし

語

とを、不空の弟子・含光といいし者が妙楽大師にかたれる

き

じゅう

まつ

ひ

の

そうろう

えびようしゅう

と

を記の十の末に引き載せられて候を、この依憑集に取

の

そうろう

ほけきよう

だいにちきよう

おと

知

り載せて候。法華經に大日經は劣るとしろしめすこと、

でんぎようだいし

みこころけんねん

伝教大師の御心顕然なり。

しやかによらい てんだいだいし みようらくだいし でんぎようだいし みこころ
されば、釈迦如来・天台大師・妙楽大師・伝教大師の御心

いちどう

だいにちきようとう

いつさいきよう

なか

ほけきよう

勝

は、一同に大日経等の一切経の中には法華経はすぐれた

ふんみよう

しんこんしゅう

がんそ

りゅうじゅ

りということとは分明なり。また真言宗の元祖という竜樹

ぼさつ

みこころ

だいちどろん

よ

よ

たず

菩薩の御心もかくのごとし。大智度論を能く能く尋ぬるな

ふんみよう

ふくう

誤

らば、このこと分明なるべきを、不空があやまれる

ぼだいしんろん

みなひと化

めいわく

菩提心論に皆人ばかされて、このことに迷惑せるか。

いわぶち

こんぞうそうじよう

みでし

くうかい

ひと

のち

また石淵の勤操僧正の御弟子に空海という人あり。後に

こうぼうだいし

号

い

えんりやくにじゅうさんねんごがつじゅうににち

は弘法大師とごうす。去ぬる延暦二十三年五月十二日に

ごにつとう

かんど

こんごうち

ぜんむい

りようさんぞう

だいさん

御入唐。漢土にわたりては金剛智・善無畏の両三蔵の第三

みでし けいかおじよう

ひと りようかい でんじゆ だいどうにねん

の御弟子・惠果和尚といひし人に両界を伝受。大同二年

じゆうがつにじゆうににち

ごきちよう

へいぜいてんのう

ぎよう

かんむてんのう

十月二十二日に御帰朝。平城天皇の御宇なり。桓武天皇は

ご 崩 御

へいぜいてんのう

げんざん

おんもち

ご き え ほか

御ほうぎよ。平城天皇に見参し御用いありて御帰依他に

異

へいぜい 程

さが よ

取

ことなりしかども、平城ほどもなく嵯峨に世をとられさせ

たま

こうぼう 引

い

でんぎようだいし

給いしかば、弘法ひき入れてありしほどに、伝教大師は

さがてんのう

こうにんじゆうさんねんろくがつよつかごにゆうめつ

おな

こうにんじゆうしねん

嵯峨天皇の弘仁十三年六月四日御入滅。同じき弘仁十四年

こうぼうだいし

おう

おんし

しんこんしゆう

た

とうじ

たま

より弘法大師、王の御師となり、真言宗を立てて東寺を給

しんこんおじよう

号

はつしゆうはじ

わり、真言和尚とごうし、これより八宗始まる。

いちだい

しyouれつ

はん

い

だいいちしんこん

だいにちきよう

だいに

一代の勝劣を判じて云わく「第一真言・大日経、第二

けごん だいさん ほつけ ねはん とううんぬん ほけきよう あごん ほうどう
華嚴、第三は法華・涅槃」等云々。「法華経は阿含・方等・

はんによとう たい しんじつ きよう けごんきよう だいにちきよう のぞ

般若等に対すれば真実の経なれども、華嚴経・大日経に望

けろん ほう きようしゆしやくそん ほとけ

むれば戲論の法なり。教主釈尊は仏なれども、大日如来

む むみよう へんいき もう こうてい ふしゆ

に向かうれば無明の辺域と申して皇帝と俘囚とのごとし。

てんだいだいし ぬすびと しんごん だいご ぬす ほけきよう だいご

天台大師は盗人なり。真言の醍醐を盗んで法華経を醍醐と

言 書 ほけきよう 思

いう」なんどかかれしかば、法華経はいみじとおもえども、

こうぼうだいし 遭 もの 数

弘法大師にあいぬれば物のかずにもあらず。

てんじく げどう お かんど なんぼく ほけきよう ねはんきよう

天竺の外道はさて置きぬ、漢土の南北が法華経は涅槃経

たい じゃけん きよう 言 勝 けごんしゆう ほけきよう

に対すれば邪見の経といいいしにもすぐれ、華嚴宗が法華経

けこんぎよう

たい

しまつきよう

もう

超

れい

は華嚴經に対すれば枝末教と申せしにもこえたり。例せば、

か がっし だいまんばらもん だいじざいてん ならえんてん ばすてん きようしゅ

彼の月氏の大慢婆羅門が自在天・那羅延天・婆藪天・教主

しやくそん しにん こうぎ あし うえ じゃほう

釈尊の四人を高座の足につくりて、その上にのぼって邪法

ひろ

でんぎようだいしごぞんしよう

いちごん

い

を弘めしがごとし。伝教大師御存生ならば、一言は出ださ

ぎしん

えんちよう

じかく

ちしようとう

れべかりけることなり。また義真・円澄・慈覚・智証等も、

ごふしん

てんかだいいち

だいきよう

いかに御不審はなかりけるやらん。天下第一の凶なり。

じかくだいし

い

じようわごねん

ごにつとう

かんど

じゆうねん

慈覚大師は去ぬる承和五年に御入唐。漢土にして十年が

あいだ

てんだい

しんごん

にしゆう

習

ほつけ

だいにちきよう

しやうれつ

間、天台・真言の二宗をならう。法華・大日經の勝劣を

なら

はっせん

げんじようとう

はちにん

しんごんし

ほけきよう

習いしに、法全・元政等の八人の真言師には、法華經と

だいにちきよう　りどうじしようとううんぬん　てんだいしゅう　しおん　こうしゅ　ゆいけんとう

大日経は理同事勝等云々。天台宗の志遠・広修・維蠲等に

なら　だいにちきよう　ほうどうぶ　しようとううんぬん　おな　じょうわ

習いしには、大日経は方等部の撰等云々。同じき承和

じゅうさんねんくがつとおか　ごきちよう　かしようがんねんろくがつじゅうよつか　せんじくだ

十三年九月十日に御帰朝。嘉祥元年六月十四日、宣旨下る。

ほつけ　だいにちきようとう　しょうれつ　かんど　知

法華・大日経等の勝劣は漢土にしてしりがたかりけるか

こんごうちようきよう　しよしちかん　そしつじきよう　しよしちかん　いじよう

のゆえに、金剛頂経の疏七卷・蘇悉地経の疏七卷、已上

じゅうしかん　しよ　こころ　だいにちきよう　こんごうちようきよう　そしつじきよう

十四卷、この疏の心は、大日経・金剛頂経・蘇悉地経の

ぎ　ほけきよう　ぎ　しよせん　り　いちどう　じそう　いん

義と法華経の義は、その所詮の理は一同なれども事相の印

しんごん　しんごん　さんぶきよう　勝　うんぬん

と真言とは真言の三部経すぐれたりと云々。これはひとえ

ぜんむい　こんごうち　ふくう　つく　だいにちきよう　しよ　こころ

に善無畏・金剛智・不空の造りたる大日経の疏の心のご

とし。

しかれども、我が心になお不審やのこりけん、また心に

解

ひと ふしん 晴

思

はとけてんげれども人の不審をはらさんとやおぼしけん、

じゅうしかん

しよ ごほんぞん

みまえ

差 置

ごきしよう

この十四巻の疏を御本尊の御前にさしおきて御祈請ありき。

つく

そうら

ぶつ いはか

だいにち

さんぶ

「かくは造つて候えども、仏意計りがたし。大日の三部や

勝

ほけきよう

さんぶ

勝

ごきねん

すぐれたる、法華經の三部やまされる」と御祈念ありしか

いつか

もう

いゝう

むそう

せいてん

だいにちりん 懸

ば、五日と申す五更にたちまちに夢想あり。青天に大日輪か

たま

や

い

やと

てん

上

かり給えり。矢をもつてこれを射ければ、矢飛んで天にのぼ

にちりん

なか

た

にちりんどうてん

ち

お

り、日輪の中に立ちぬ。日輪動転してすでに地に落ちんと

思 打 覚

よろこ

い

われきちむ

すとおもいてうちさめぬ。悦んで云わく「我吉夢あり。

ほけきよう しんこんすぐ

つく

書

ぶつゐ

かな

法華經に真言勝れたりと造りつるふみは、仏意に叶いけり」

よろこ

たま

せんじ

もう

くだ

にほんこく

ぐつう

と悦ばせ給いて、宣旨を申し下し日本国に弘通あり。しか

せんじ

こころ

い

し

てんだい

しかん

しんこん

も宣旨の心に云わく「ついに知んぬ、天台の止観と真言の

ほう

ぎりみよう

あ

とううんぬん

きしよう

法とは、義理冥に符えり」等云々。祈請のごときんば、

だいにちきよう

ほけきよう

おと

せんじ

もう

くだ

大日經に法華經は劣なるようなり。宣旨を申し下すには、

ほけきよう

だいにちきよう

おな

とううんぬん

法華經と大日經とは同じ等云々。

ちしようだいし

ほんちよう

ぎしんかしよう

えんちようだいし

べつとう

じ

智証大師は本朝にしては義真和尚・円澄大師・別当・慈

かくとう

でし

けんみつ

にどう

だいたい

くに

かく

たま

覚等の弟子なり。顕密の二道は大体この国にして学し給い

てんだい しんごん にしゅう しょうれつ ごふしん かんど わた たま

けり。天台・真言の二宗の勝劣の御不審に漢土へは渡り給

いけるか。去ぬる仁寿二年に御入唐。漢土にしては真言宗 しんごんしゅう

はっせん げんじょうとう 習 たま だいたいだいにかきよう ほけきよう

は法全・元政等にならわせ給い、大体大日経と法華経と

りどうじしよう じかく ぎ てんだいしゅう りようしよかしよう 習

は理同事勝、慈覚の義のごとし。天台宗は良諲和尚になら

たも しんごん てんだい しょうれつ だいにちきよう けごん ほつけとう およ

い給う。真言・天台の勝劣、大日経は華嚴・法華等には及

とううんぬん しちねん あいだかんど へ い じようがんがんねんごがつ

ばず等云々。七年が間漢土に経て、去ぬる貞観元年五月

じゅうしちにちごきちよう だいにちきよう しき い ほつけ およ

十七日御帰朝。大日経の指帰に云わく「法華すらなお及ば

ず。いわんや自余の教えをや」等云々。この釈は、法華経

じよ かし とううんぬん しゃく ほけきよう

は大日経には劣る等云々。また授決集に云わく「真言・

だいにちきよう おと とううんぬん じゆけつしゅう い しんごん

は大日経には劣る等云々。また授決集に云わく「真言・

ぜんもんじゃないし けごん ほつけ ねはんとう きよう のぞ

禅門乃至もし華嚴・法華・涅槃等の經に望めば、これ

しょういんもん とううんぬん ふげんぎよう き ん き い おな

摂引門なり」等云々。普賢經の記、論の記に云わく「同じ」

とううんぬん じようがんはちねんひのえいぬしがつにじゆうくにちみずのえさる ちよくせん もう

等云々。貞觀八年丙戌四月二十九日壬申、勅宣を申し

くだ い き しんごん しかんりようきよう しゆう おな

下して云わく「聞くならく、真言・止觀兩教の宗、同じ

だいご じんぴ しよう とううんぬん

く醍醐と号し、ともに深秘と称す」等云々。また六月三日

ちよくせん い せんしすで りようごう ひら わ どう

の勅宣に云わく「先師既に兩業を開いて、もつて我が道と

だいだい ざすそうじよう か った ざいご

なす。代々の座主相承して兼ね伝えざることなし。在後の

やから きゆうせき そむ さんじよう そうとうもつば

輩あに旧迹に乖かんや。聞くならく、山上の僧等専ら

せんし ぎ たが へんしゆう こころ な よかぜ せんよう

先師の義に違いて偏執の心を成す。ほとんど余風を扇揚

くろう へうりゆう

かえり

に

しし

し旧業を興隆するを顧みざるに似たり。およそ、その師資

どう

ひと

か

ふ

か

でんぐ

つと

の道、一つを闕いても不可なり。伝弘の勤め、いずくんぞ

けんび

いま

いご

りようきよう

つうだつ

兼備せざらんや。今より以後、よろしく両教に通達する

ひと

えんりやくじ

ざす

た

こうれい

の人を延暦寺の座主となすをもつて、立てて恒例となすべ

うんぬん

し」云々。

じかく

ちしよう

ににん

でんぎよう

ぎしん

みでし

かんど

されば、慈覚・智証の二人は伝教・義真の御弟子。漢土

渡

てんだい

しんごん

みようし

あ

にわたりてはまた天台・真言の明師に値つてありしかども、

にしゅう

しやうれつ

おも

さだ

しんごん

勝

二宗の勝劣は思い定めざりけるか。あるいは真言はすぐれ、

ほっけ

りどうじしやうとうんぬん

せんじ

もう

あるいは法華すぐれ、あるいは理同事勝等云々。宣旨を申し

くだ にしゅう しょうれつ ろん ひと いちよく もの 戒

下すには、二宗の勝劣を論ぜん人は違勅の者といましましめら

みな じごそうい 言 たしゅう ひと

れたり。これらは皆、自語相違といいぬべし。他宗の人は

もち 見 そうろう

よも用いじとみえて候。

にしゅうさいとう せんし でんぎようだいし おんぎ せんじ

ただし、「二宗齊等とは、先師・伝教大師の御義」と宣旨

ひ の でんぎようだいし しょ 書

に引き載せられたり。そもそも伝教大師いずれの書にかか

そうろう 能 たず

れて候ぞや。このことよくよく尋ぬべし。

じかく ちしよう にちれん でんぎようだいし おんこと ふしんもう

慈覚・智証と日蓮とが伝教大師の御事を不審申すは、親

あ とし 争 につてん あ たてまつ め 比

に値つての年あらそい、日天に値い奉つての目くらべに

そうら じかく ちしよう おん 方 人 たま

ては候えども、慈覚・智証の御かとうどをせさせ給わん

ひとびと

ふんみよう

しょうもん

構

たも

せん

人々は、分明なる証文をかまえさせ給うべし。詮ずると

しん 取

げんじようさんぞう

がっし

ばしやろん

ころは信をとらんがためなり。玄奘三蔵は月氏の婆沙論を

み

ひと

てんじく

渡

ほうほっし

責

見たりし人ぞかし。天竺にわたらざりし宝法師にせめられ

ほうごさんぞう

いんど

ほけきよう

み

ぞくるい

せんご

にき。法護三蔵は印度の法華経をば見たれども、囑累の先後

かんど

ひと見

あやま

言

じ

をば、漢土の人みねども誤りといひしぞかし。たとい、慈

かく

でんぎようだいし

あ

たてまつ

なら

つつ

ちしよう

ぎ

覚、伝教大師に値い奉って習い伝えたりとも、智証、義

しんかしよう

くけつ

言

でんぎよう

ぎしん

しょうもん

そうい

真和尚に口決せりというとも、伝教・義真の正文に相違せ

ふしん

くわ

ば、あに不審を加えざらん。

でんぎようだいし

えびようしゆう

もう

ふみ

だいしだいいち

ひしよ

か

伝教大師の依憑集と申す文は、大師第一の秘書なり。彼

の書の序に云わく「新来の真言家は則ち筆授の相承を泯

ぼし、旧到の華嚴家は則ち影響の軌範を隠す。沈空の

三論宗は彈訶の屈恥を忘れて称心の酔を覆い、著有の

法相は撲陽の帰依を非して青竜の判経を撥う」等。乃至

「謹んで依憑集一卷を著して同我の後哲に贈る。その時、

興ること日本の第五十二葉、弘仁の七丙申歳なり」云々。

次下の正宗に云わく「天竺の名僧、大唐天台の教迹最

も邪正を簡ぶに堪えたりと聞いて、渴仰して訪問す」云々。

次下に云わく「あに中国に法を失つてこれを四維に求む

るにあらずや。しかるに、この方に識ることある者少なし。かた し ものすく

ろひと

とうろんぬん

しよ ほつそう さんろん けごん しんごん

魯人のごとし」等云々。この書は法相・三論・華嚴・真言の

ししゅう

責

そうろうふみ

てんだい しんごん にしゅう どういつみ

四宗をせめて候文なり。天台・真言の二宗、同一味なら

責

そうろう

ふくうさんぞうとう

ろひと

ば、いかでかせめ候べき。しかも不空三蔵等をば「魯人の

書

そうろう

ぜんむい こんごうち

ふくう

ごとし」なんどかかれて候。善無畏・金剛智・不空の

しんごんしゅう

ろひと あつく

真言宗いみじくば、いかでか魯人と悪口あるべき。また

てんじく

しんごん

てんだいしゅう

おな

すぐ

天竺の真言が、天台宗に同じきも、また勝れたるならば、

てんじく

めいそう

ふくう

誂

ちゅうごく しやうほう

天竺の名僧いかでか不空にあつらえ、中国に正法なしと

言

はいうべき。

それはいかにもあれ、慈覚・智証の二人は、言は伝教

だいし みでし 名乗 たま ところ みでし

大師の御弟子とはなのらせ給えども、心は御弟子にあらず。

ゆえ しょ い つつし えびようしゅういつかん あらわ

その故は、この書に云わく「謹んで依憑集一卷を著して

どうが こうてつ おく どううんぬん どうが にじ しんごんしゅう

同我の後哲に贈る」等云々。「同我」の二字は、真言宗は

てんだいしゅう おと 習 どうが われ

天台宗に劣るとならいてこそ、同我にてはあるべけれ。我

もう くだ せんじ い もつぱ せんし ぎ たが

と申し下さるる宣旨に云わく「専ら先師の義に違いて

へんしゅう こころ な どううんぬん い しし

偏執の心を成す」等云々。また云わく「およそ、その師資

どう ひと か ふか どううんぬん せんじ

の道、一つを闕いても不可なり」等云々。この宣旨のごと

じかく ちしよう もつぱ せんし ひと そうら

くならば、慈覚・智証こそ専ら先師にそむく人にては候え。

責

そうろう

恐

そうら

責

こうせめ候もおそれにては候えども、これをせめずば

だいにちきよう

ほけきよう

しょうれつ

破

ぞん

命

的

大日経・法華経の勝劣やぶれなんと存じて、いのちをまと

懸

そうろう

ににん

ひとびと

こうぼうだいし

じやぎ

にかけてせめ候なり。この二人の人々の弘法大師の邪義

そうら

もつと

どうり

そうら

をせめ候わざりけるは、最も道理にて候いけるなり。

ろうまい

尽

ひと

煩

かんど

渡

されば、糧米をつくし人をわずらわかして漢土へわたら

たま

ほんし

でんぎようだいし

おんぎ

尽

せ給わんよりは、本師・伝教大師の御義をよくよくつくさ

たも

えいざん

ぶつぼう

でんぎよう

せ給うべかりけるにや。されば、叡山の仏法は、ただ伝教

だいし

ぎしんかしよう

えんちようだいしさんだい

てんだい

大師・義真和尚・円澄大師三代ばかりにてやありけん。天台

ざす

しんこんざす

移

な

しよりよう

てんだいさん

座主すでに真言座主にうつりぬ。名と所領とは天台山、そ

主 しんごんし

じかくだいし ちしようだいし いこん

のぬしは真言師なり。されば、慈覚大師・智証大師は「已今

とう

きようもん

破

たも ひと

いこんとう

きようもん

当」の経文をやぶらせ給う人なり。「已今当」の経文をや

たも

しやか

たほう

じっぽう

しよぶつ

おんてき

ぶらせ給うは、あに釈迦・多宝・十方の諸仏の怨敵にあら

ずや。

こうぼうだいし

だいいち

ほうぼう

ひと

思

弘法大師こそ第一の謗法の人とおもうに、これはそれに

似

ひがごと

ゆえ

すいか

てんち

はにるべくもなき僻事なり。その故は、水火・天地なるこ

ひがごと

ひともち

ひがごとじよう

とは、僻事なれども人用いることなれば、その僻事成ず

こうぼうだいし

おんぎ

ひがごと

でしとう

ることなし。弘法大師の御義はあまり僻事なれば、弟子等も

もち

じそう

もんけ

用いることなし。事相ばかりはその門家なれども、その

きようそう ほうもん こうぼう ぎ言

故

ぜんむい こんごう

教相の法門は弘法の義いいにくきゆえに、善無畏・金剛

ち ふくう じかく ちしよう ぎ

じかく ちしよう ぎ

智・不空・慈覚・智証の義にてあるなり。慈覚・智証の義こ

しんごん てんだい

りどう

もう

みなひと

そ「真言と天台とは理同なり」なんと申せば、皆人さもや

思

じしよう

いん

しんごん

とおもう。こうおもうゆえに、事勝の印と真言とについて、

てんだいしゅう

ひとびと

えぞう

もくぞう

かいげん

ぶつじ

狙

天台宗の人々、画像・木像の開眼の仏事をねらわんがため

にほんいちどう

しんごんしゅう

落

てんだいしゅう

いちにん

に、日本一同に真言宗におちて、天台宗は一人もなきな

り。

れい

ほっし

あま

くろ

あお

紛

まなこ

例せば、法師と尼と、黒と青とはまがいぬべければ、眼

暗

ひと

過

そう

なん

しろ

あか

め

ひと

くらき人あやまつぞかし。僧と男と、白と赤とは目くらき人

まよ

況

まなこ

明

もの

じかく

ちしよう

も迷わず。いおうや眼あきらかなる者をや。慈覚・智証の

ぎ

ほっし

あま

くろ

あお

ちじん

まよ

義は、法師と尼と、黒と青とがごとくなるゆえに、智人も迷

ぐにん

誤

そうら

しひやくよねん

あいだ

えいざん

い愚人もあやまり候いて、この四百余年が間は、叡山・

おんじよう

とうじ

なら

ごきしちどう

にほんいつしゆう

みなほうぼう

もの

園城・東寺・奈良、五畿七道、日本一州、皆謗法の者とな

りぬ。

ほけきよう

だいご

もんじゆしり

ほけきよう

そもそも法華經の第五に「文殊師利よ。この法華經は、

しよぶつによらい

ひみつ

ぞう

しよきよう

なか

もつと

諸仏如来の秘密の蔵にして、諸經の中において最もその

かみ

あ

うんぬん

きようもん

ほけきよう

上に在り」云々。この經文のごとくならば、法華經は

だいにちきようとう

いっさいきよう

ちようじよう

じゆう

たも

しようほう

大日經等の一切經の頂上に住し給う正法なり。さる

にては、ぜんむい・善無畏・こんごうち・金剛智・ふくう・不空・こうぼう・弘法・じかく・慈覺・ちしようとう・智証等は、

きようもん

えつう

たも

ほけきよう

だいしち

この經文をばいかんが会通せさせ給うべき。法華經の第七

い

よ

きようてん

じゅじ

もの

に云わく「能くこの經典を受持することあらん者もまたか

いっさいしゅじよう

なか

だいいち

くのごとく、一切衆生の中において、またこれ第一なり」

とううんぬん

きようもん

ほけきよう

ぎようじゃ

せんる

等云々。この經文のごとくならば、法華經の行者は、川流

こうが

なか

たいかい

しゅせん

なか

しゅみせん

しゅしよう

なか

がつてん

江河の中の大海、衆山の中の須弥山、衆星の中の月天、

しゅみよう

なか

だいにってん

てんりんおう

たいしやく

しよおう

なか

だぼんのう

衆明の中の大日天、転輪王・帝釈・諸王の中の大梵王な

り。

でんぎようだいし

しゅうく

もう

しよ

い

きよう

伝教大師の秀句と申す書に云わく「この經もまたかく

ないしもろもろ

きようぼう

なか

もつと

だいいち

よ

のごとく乃至諸の経法の中に、最もこれ第一なり。能く

きようてん

じゆじ

もの

この經典を受持することあらん者もまたかくのごとく、

いつさいしゆじよう

なか

だいいち

いじよう

きようもん

一切衆生の中において、またこれ第一なり〔已上、經文な

ひい

たま

つぎしも

い

てんだい

ほつけげん

り〕と引き入れさせ給いて、次下に云わく「天台、法華玄

い

とううんぬん

いじよう

げん

もん

書

たま

かみ

こころ

に云わく等云々〔已上、玄の文〕とかかせ給いて、上の心

しゃく

い

まさ

し

たしゆう

よ

きよう

を釈して云わく「当に知るべし、他宗の依るところの經は

もつと

だいいち

よ

きよう

たも

もの

いまだ最もこれ第一ならず。その能く經を持つ者もまた

だいいち

てんだいほつけしゆう

たも

ほけきよう

もつと

いまだ第一ならず。天台法華宗の持つところの法華經は最

だいいち

ゆえ

よ

ほつけ

たも

もの

しゆじよう

なか

もこれ第一なるが故に、能く法華を持つ者もまた衆生の中

だいいち

ぶつせつ よ

じたん

とううんぬん

に第一なり。すでに仏説に拠る。あに自歎ならんや」等云々。

つぎしも

ゆず しやく

い

いきよく

えびよう

べつかん

あ

次下に譲る釈に云わく「委曲の依憑、つぶさに別卷に有る

とううんぬん

えびようしゆう

い

いま

わ

てんだいだいし

ほけきよう

なり」等云々。依憑集に云わく「今、吾が天台大師、法華經

と

ほけきよう

しやく

ぐん

どくしゆう

とう

どつぽ

あき

を説き法華經を釈すること、群に特秀し唐に独歩す。明ら

し

によらい

つか

ほ

もの

ふく

あんみよう

つ

かに知んぬ、如来の使いなり。讃むる者は福を安明に積み、

そし

もの

つみ

むけん

ひら

とううんぬん

謗る者は罪を無間に開く」等云々。

ほけきよう

てんだい

みようらく

でんぎよう

きようしやく

こころ

法華經・天台・妙楽・伝教の經釈の心のごとくなら

いま にほんこく

ほけきよう

ぎようじゃ

いちにん

がつし

ば、今、日本国には法華經の行者は一人もなきぞかし。月氏

きようしやくしやくそん

ほうとうほん

いっさい

ほとけ

集

たま

には教主釈尊、宝塔品にして一切の仏をあつめさせ給い

だいち うえ こ

だいにちによらい

ほうとう

なか

みなみ

て大地の上に居せしめ、大日如来ばかり宝塔の中の南の

しもぎ 据 たてまつ

きようしゆしやくそん

きた

かみぎ

着

たも

下座にすえ奉って、教主釈尊は北の上座につかせ給う。

だいにちによらい

だいにちきよう

たいどうかい

だいにち

こんごうちようきよう

この大日如来は大日経の胎蔵界の大日、金剛頂経の

こんごうかい

だいにち

しゆくん

りようぶ

だいにちによらい

ろうじゅうとう

さだ

金剛界の大日の主君なり。両部の大日如来を郎徒等と定め

たほうぶつ

かみぎ

きようしゆしやくそん こ

たも

すなわ

たる多宝仏の上座に、教主釈尊居せさせ給う。これ即ち

ほけきよう

ぎようじや

てんじく

かんど

ちんてい

とき

法華経の行者なり。天竺かくのごとし。漢土には陳帝の時、

てんだいだいし

なんぼく

責

勝

げんしん

だいいし

ぐん

天台大師、南北にせめかちて、現身に大師となる。「群に

どくしゅう

とう

どつぽ

にほんこく

でんぎよう

特秀し唐に独歩す」という、これなり。日本国には伝教

だいいし

ろくしゅう

にほん

はじ

だいいち

こんぼんだいし

大師、六宗にせめかちて、日本の始め第一の根本大師とな

たも

り給う。

がっし

かんど

にほん

さんにな

いつさいしゅじよう

なか

月氏・漢土・日本にただ三人ばかりこそ「一切衆生の中

だいいち

そうら

しゅうく

い

において、またこれ第一」にては候え。されば、秀句に云

あさ

やす

ふか

かた

しゃか

しよはん

あさ

わく「浅きは易く深きは難しとは、釈迦の所判なり。浅き

さ

ふか

つ

じようぶ

こころ

てんだいだいし

しゃか

を去って深きに就くは、丈夫の心なり。天台大師は釈迦に

しんじゆん

ほつけしゆう

たす

しんたん

ふよう

えいざん

いつけ

てんだい

信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に

そうじよう

ほつけしゆう

たす

にほん

ぐつう

とううんぬん

相承し法華宗を助けて日本に弘通す」等云々。

ほとけ

めつごいつせんはつぴやくよねん

あいだ

ほけきよう

ぎようじや

かんど

仏の滅後一千八百余年が間に法華經の行者、漢土に

いちにん

にほん

いちにん

いじようにな

しゃくそん

くわ

たてまつ

いじようさんにん

一人、日本に一人、已上二人、釈尊を加え奉つて已上三人

なり。外典に云わく、聖人は一千年に一たび出で、賢人は
ごひやくねん ひと せいじん いっせんねん ひと い
ごひやくねん ひと こうが けい い 流 分
五百年に一たび出ず。黄河は涇・渭ながれをわけて、五百年
なか かわ清 せんねん とも す もう いちじよう
には半ば河すみ、千年には共に清むと申すは、一定にて候
いけり。

しかるに、日本国は、叡山ばかりに伝教大師の御時
にほんこく えいざん でんぎようだいし おんとき

法華經の行者ましましけり。義真・円澄は第一・第二の
ほけきよう ぎようじや ぎしん えんちよう だいいち だいに

座主なり。第一の義真ばかり伝教大師にいたり。第二の
ざす だいいち ぎしん でんぎようだいし 似 だいに

円澄は、半ばは伝教の御弟子、半ばは弘法の弟子なり。
えんちよう なか でんぎよう みでし なか こうぼう でし

第三の慈覚大師は、始めは伝教大師の御弟子にいたり。
だいさん じかくだいし はじ でんぎようだいし みでし 似

おんとししじゅう

かんど

渡

な でんぎよう

みでし

御年四十にて漢土にわたりてより、名は伝教の御弟子、そ

あと

継

たま

ほうもん

まった

みでし

の跡をばつがせ給えども、法門は全く御弟子にはあらず。

えんどん

かい

みでし

似

しかれども、円頓の戒ばかりはまた御弟子ににたり。

へんぶくちよう

とり

蝙蝠鳥のごとし。鳥にもあらず、ねずみにもあらず。

きようちようきん

はけいじゅう

ほけきよう

ちち

く

じしや

はは

梟鳥禽、破鏡獣のごとし。法華經の父を食らい、持者の母

嚙

ひ

射

夢

見

をかめるなり。日をいとゆめにみし、これなり。されば、

しきよ

のち

はか無

止

死去の後は墓なくてやみぬ。

ちしよう

もんけ

おんじようじ

じかく

もんけ

えいざん

しゆら

あくりゆう

智証の門家・園城寺と慈覚の門家・叡山と、修羅と悪竜

かつせん

隙

おんじようじ

焼

えいざん

ちしようだいし

と、合戦ひまなし。園城寺をやき、叡山をやく。智証大師の

ほんぞん　じしぼさつ

じかくだいし　ほんぞん　だいこうどう

本尊の慈氏菩薩もやけぬ。慈覚大師の本尊・大講堂もやけ

げんしん　むけんじごく　感

ちゅうどう　残

ぬ。現身に無間地獄をかんぜり。ただ中堂ばかりのこれり。

こうぼうだいし　あと　こうぼうだいし　とうだいじ　じゅかい

弘法大師もまた跡なし。弘法大師云わく「東大寺の受戒せ

もの　とうじ　ちようじや　とう　おん　戒

ざらん者をば、東寺の長者とすべからず」等、御いましめ

じよう　かんぴようほうおう　にんなじ　こんにゆう

の状あり。しかれども、寛平法王、仁和寺を建立して、

とうじ　ほつし　移　わ　てら　えいざん　えんどんかい　たも

東寺の法師をうつして、「我が寺には叡山の円頓戒を持たざ

もの　じゆう　せんじふんみよう

らん者をば住せしむべからず」と宣旨分明なり。されば、

いま　とうじ　ほつし　がんじん　でし　こうぼう　でし

今の東寺の法師は、鑑真が弟子にもあらず、弘法の弟子に

かい　でんぎよう　みでし　でんぎよう　みでし

もあらず。戒は伝教の御弟子なり。また伝教の御弟子に

でもんぎよう　ほけきよう　はしつ
もあらず、伝教の法華経を破失す。

い　じようわにねんさんがつにじゆういちにち　しきよ

去ぬる承和二年三月二十一日に死去ありしかば、公家よ

いた　い　たも　のち　おうわく　でしとうあつ

り遺体をはほらせ給う。その後、誑惑の弟子等集まつて、

ごにゆうじよう　うんぬん　髪　剃

「御入定」と云々。あるいは「かみをそりてまいらするぞ」

言　さんこ　漢　土　投

といい、あるいは「三鈷をかんどよりなげたり」といい、

にちりん　よなか　い　げんしん

あるいは「日輪、夜中に出でたり」といい、あるいは「現身

だいにちによらい　たも　でんぎようだいし

に大日如来となり給う」といい、あるいは「伝教大師に

じゆうはちどう　教　し　とく　挙

十八道をおしえまいらせたり」といい、師の徳をあげて

ちえ　代　わ　し　じゃぎ　たす　おうしん　おうわく

智慧にかえ、我が師の邪義を扶けて王臣を誑惑するなり。

こうやさん ほんじ でんぼういん

ふた てら

ほんじ

また高野山に本寺・伝法院といいし二つの寺あり。本寺は

こうぼう 立

だいとう だいにちによらい

でんぼういん もう

弘法のたてたる大塔、大日如来なり。伝法院と申すは

しょうがくぼう た

こんごうかい だいにち

ほんまつ にじ

正覚房が立てたる金剛界の大日なり。この本末の二寺、

ちゆうや かつせん

れい えいざん おんじよう

昼夜に合戦あり。例せば叡山・園城のごとし。

おうわく 積

にほん ふた

わざわ しゅつげん

ふん

誑惑のつもりて日本に二つの禍いの出現せるか。糞を

あつ せんだん

や とき

ふん 香

だいもうご

集めて梅檀となせども、焼く時はただ糞のかなり。大妄語を

あつ ほとけ 号

むけんだいじよう

にけん とう

集めて仏とごうすれども、ただ無間大城なり。尼犍が塔は

すうねん あいだりしようにうだい

めみようぼさつ らい 受

数年が間利生広大なりしかども、馬鳴菩薩の礼をうけてた

崩

きべんばらもん

帷 たねんひと

誑

ちまちにくずれぬ。鬼弁婆羅門がとばりは多年人をたばら

あしゅばくしやぼさつ

責

破

くる

かせしかども、阿湿縛窣沙菩薩にせめられてやぶれぬ。拘留

げどう いし

はつびやくねん じんなぼさつ

みず

外道は石となつて八百年、陳那菩薩にせめられて水となり

どうし かんど

誑

すうひやくねん

まとう

じくらん

ぬ。道士は漢土をたぼらかすこと数百年、摩騰・竺蘭にせ

せんきよう

焼

ちようこう

くに

取

おうもう

くらい

められて仙經もやけぬ。趙高が国をとりし、王莽が位を

奪

ほけきよう

くらい

取

だいにちきよう

しよりよう

うばいしがごとく、法華經の位をとつて大日經の所領と

ほうおう

くに

う

にんのう

あんのん

せり。法王すでに国に失せぬ。人王あに安穩ならんや。

にほんこく

じかく

ちしよう

こうぼう

なが

いちにん

ほうぼう

日本国は慈覺・智証・弘法の流れなり。一人として謗法な

ひと

じ

こころ

あん

だいしようこんぶつ

らざる人はなし。ただし、事の心を案ずるに、大莊嚴仏の

まつ いっさいみようおうぶつ

まつぼう

いおんのうぶつ

まつぼう

かいげ

末、一切明王仏の末法のごとし。威音王仏の末法には、改悔

せんごうあびじごく

お

況

ありしすら、なお千劫阿鼻地獄に墮つ。いかにいおうや、

にほんこく

しんごんし

ぜんしゅう

ねんぶつしやとう

いちぶん

えしん

日本国の真言師・禅宗・念仏者等は一分の廻心なし。「か

てんでん

むしゅこう

いた

うたが

くのごとく展転して、無数劫に至らん」、疑いなきものか。

ほうぼう

くに

てん

捨

てん

古

かかる謗法の国なれば、天もすてぬ。天すつれば、ふるき

しゅご

ぜんじん

祠

焼

じやつこう

みやこ

帰

たま

守護の善神もほこらをやいて寂光の都へかえり給いぬ。

にちれん

とど

いっしめ

こくしゅ

怨

ただ日蓮ばかり留まり居て告げ示せば、国主これをあだみ、

すうひやくにん

たみ

めり

あつく

数百人の民に、あるいは罵詈、あるいは悪口、あるいは

じょうもく

とうけん

いえいえ

塞

杖木、あるいは刀剣、あるいは宅々ごとにせき、あるいは

いえいえ

追

叶

われ

て

下

にど

家々ごとにおう。それにかなわねば、我と手をくだして二度

るざい　い　ぶんえいはちねんくがつ　じゅうににち　くび　き
まで流罪あり。去ぬる文永八年九月の十二日には頸を切ら
んとす。

さいしようおうきよう　い　あくにん　あいぎよう　ぜんにん　じばつ　よ

最勝王経に云わく「悪人を愛敬し善人を治罰するに由

ゆえ　たほう　おんぞくきた　こくじんそうらん　あ　とううんぬん

るが故に、他方の怨賊来つて、国人喪乱に遭わん」等云々。

だいじつきよう　い　もろもろ　せつりこくおう　もろもろ

大集経に云わく「もしまた、諸の刹利国王にして諸の

ひほう　な　せそん　しょうもん　でし　のうらん

非法を作し、世尊の声聞の弟子を悩乱し、もしはもつて

きめ　とうじよう　ちようしやく　えはつ　しゅじゅ　しぐ　うげ

毀罵し、刀杖もて打斫し、および衣鉢・種々の資具を奪

た　きゆうせ　るなん　な　ものあ　われ　かれ

い、もしは他の給施に留難を作す者有らば、我らは彼をし

じねん　にわ　たほう　おんてき　お　じかい

て自然に卒かに他方の怨敵を起こさしめ、および自界の

こくど

ひようき

びようえき

ききん

ひじ

ふうう

とうじようごんしよう

国土にもまた兵起・病疫・飢饉・非時の風雨・鬭諍言訟

おう

ひさ

まさ

おの

あらしめ、またその王をして久しからずしてまた当に己が

くに もうしつ

とううんぬん

国を亡失すべからしむ」等云々。

もん

にちれん

くに

ほとけ

これらの文のごときは、日蓮この国になくば、仏は

だいもうご

ひと

あびじごく

のが

たも

い

ぶんえい

大妄語の人、阿鼻地獄はいかで脱れ給うべき。去ぬる文永

はちねんくがつじゅうににち

へいのさえもん

すうひやくにん

む

い

八年九月十二日、平左衛門ならびに数百人に向かつて云わ

にちれん

にほんこく

柱

にちれん

うしな

く「日蓮は日本国のはしらなり。日蓮を失うほどならば、

にほんこく

倒

とううんぬん

きようもん

日本国のはしらをたおすになりぬ」等云々。この経文に、

ちじん

こくしゆとう

あくそうとう

讒

言

しよにん

智人を国主等、もしは悪僧等がざんげんにより、もしは諸人

あつく

とが 当

戦 起

の悪口によつて失にあつるならば、にわかにくさおこり、

おおかせ 吹

たこく

責

とううんぬん

い

ぶんえいくねん

また大風ふかせ、他国よりせむべし等云々。去ぬる文永九年

にがつ

同

士

戦

おな

じゅういちねん

しがつ

おおかせ

おな

二月のどしいくさ、同じき十一年の四月の大風、同じき

じゅうがつ

だいもうこ

きた

にちれん

十月に大蒙古の来りしは、ひとえに日蓮がゆえにあらずや。

況

さき

勘

たれ

ひと

うたが

いおうや、前よりこれをかながえたり。誰の人か疑うべき。

こうぼう

じかく

ちしょう

あやま

ぜんしゅう

ねんぶつしゅう

弘法・慈覚・智証の誤りならびに禅宗と念佛宗との

禍

相 起

ぎやくふう

おおなみ 起

おおじしん

重

わざわいあいおこりて、逆風に大波おこり、大地震のかさ

漸

くに

衰

だいじょうのにゆうどう

なれるがごとし。されば、ようやく国おとろう。太政入道

くに

押

じようきゆう

おうい 尽

果

よ あずま

移

が国をおさえ、承久に王位つきはてて、世東にうつりし

かども、ただ国中のみだれにて他国のせめはなかりき。
こくちゆう 乱 たこく 責

彼は謗法の者は国に充滿せりといえどもささえ顕す
かれ ほうぼう もの くに じゅうまん 障 あらわ

智人なし。かるがゆえになのめなりき。譬えば、師子のねぶ
ちじん 斜 たと しし 眠

れるは手をつけざればほえず、はやき流れは櫓をささえざ
て 付 吼 迅 なが ろ 支

れば波たかからず、盗人はとめざればいからず、火は薪を
なみ 高 ぬすびと 止 怒 ひ たきぎ

加えざればさかんならず。謗法はあれども、あらわす人な
くわ 盛 ほうぼう 顕 ひと

ければ、国もおだやかなるにいたり。例せば、日本国に仏法
くに 穩 似 れい にほんこく ぶつぼう

わたりはじめて候いしに、始めはなに事もなかりしかども、
渡 始 そうら はじ 何 こと

守屋仏をやき僧をいましめ堂塔をやきしかば、天より火の
もりやほとけ 焼 そう 戒 どうとう 焼 天ん ひ

あめ降

くに

疱

瘡

起

ひようらん

続

雨ふり、国にほうそうおこり、兵乱つづきしがごとし。

似

ほうぼう

ひとひと

くに

これは、それにはにるべくもなし。謗法の人々も国に

じゆうまん

にちれん

たいぎ

つよ

責

懸

しゆら

たいしやく

充滿せり。日蓮が大義も強くせめかかる。修羅と帝釈と、

ほとけ

まおう

かつせん

劣

仏と魔王との合戦にもおとるべからず。

こんこうみようきよう

い

とき

りんごく

おんてき

おも

金光明経に云わく「時に隣国の怨敵かくのごとき念い

おこ

まさ

しひよう

ぐ

か

こくど

やぶ

とう

を興さん。『当に四兵を具して彼の国土を壊るべし』と」等

うんぬん

い

とき

おうみ

お

すなわ

しひよう

ととの

か

云々。また云わく「時に王見已わって、即ち四兵を蔽え彼

くに

はつこう

とうぼう

ほつ

われ

とき

まさ

の国に発向し、ために討罰せんと欲す。我らその時、当に

けんぞく

むりようむへん

やくしや

しよじん

おのおのかたち

かく

眷属たる無量無辺の薬叉・諸神と、各形を隠してために

ごじよ な か おんてき じねん こうぶく どううんぬん

護助を作し、彼の怨敵をして自然に降伏せしむべし」等云々。

さいしようおうきよう もん だいじつきよううんぬん にんのうきよう

最勝王経の文またかくのごとし。大集経云々、仁王経

うんぬん きようもん しようほう ぎよう

云々。これらの経文のごときんば、正法を行ずるものを

こくしゆ 怨 じゃほう ぎよう もの 方 人 だいぼんてんのう

国主あだみ、邪法を行ずる者のかとうどせば、大梵天王・

たいしやく にちがつ してんとう りんごく けんおう み い 替

帝釈・日月・四天等、隣国の賢王の身に入りかわりてその

くに 責 見 れい きりたおう せつせんげおう

国をせむべしとみゆ。例せば、訖利多王を雪山下王のせめ、

だいぞくおう ようにちおう うしな きりたおう だいぞくおう

大族王を幼日王の失いしがごとし。訖利多王と大族王とは、

がつし ぶつぼう うしな おう かんど ぶつぼう 滅

月氏の仏法を失いし王ぞかし。漢土にも仏法をほろぼしし

おう けんおう 責

王、みな賢王にせめられぬ。

これは彼にはにるべくもなし。仏法のかとうどなるよう

ぶつぽう うしな ほつし 方 人 故 ぐしや

にて仏法を失う法師のかとうどをするゆえに、愚者はすべ

知 ちしや つね ちじん 知 てん げれつ

てしらず、智者なんども常の智人はしりがたし。天も下劣の

てんにん し かんど がっし 古

天人は知らずもやあるらん。されば、漢土・月氏のいにしえ

乱 おお

のみだれよりも大きなるべし。

ほうめつじんきよう い われはんないおん のち ごぎやくじよくせ まどう

法滅尽経に云わく「吾般泥洹して後、五逆濁世に魔道

こうじよう ま しゃもん な わ どう えらん ないしあくにんうた

興盛し、魔は沙門と作つて吾が道を壊乱せん乃至悪人転た

おお かいちゆう すな ぜんしや すく

多くして海中の沙のごとし。善者はなはだ少なくして、も

いち に うんぬん ねはんぎよう い

しは一、もしは二ならん」云々。涅槃経に云わく「かくの

とう ねはんきようてん しん とうじよう ど
ごとき等の涅槃經典を信ずるものは、爪上の土のごとく
ないし きよう しん じつぼうかい じ ど

乃至この経を信ぜざるものは、十方界のあらゆる地の土の

ごとし」等云々。この経文は予が肝に染みぬ。
とううんぬん きようもん よ きも そ

とうせいにはんこく われ ほけきよう しん しよにん
当世日本国には「我も法華経を信じたり、信じたり」。諸人
ことば いちにん ほうぼう もの きようもん

の語のごときんば、一人も謗法の者なし。この経文には

まつぼう ほうぼう もの じつぼう じ ど しようほう もの そうじよう ど
「末法に謗法の者は十方の地の土、正法の者は爪上の土」

等云々。経文と世間とは水火なり。世間の人云わく「日本
とううんぬん きようもん せけん すいか せけん ひとい にほん

国には日蓮一人ばかり謗法の者」等云々。また経文には
こく にちれんいちにん ほうぼう もの とううんぬん きようもん

天地せり。法滅尽経には「善者は一・二人ならん」、涅槃経
てんち ほうめつじんぎよう ぜんしや いち ににん ねはんぎよう

しん もの そうじよう ど とううんぬん きようもん
には「信ずる者は爪上の土」等云々。経文のごとくなら

にほんこく

にちれんいちにん

そうじよう

ど

いち

ににん

ば、日本国はただ日蓮一人こそ「爪上の土」「一・二人」

そうら

きようもん

もち

せけん

もち

にては候え。経文をや用いるべき、世間をか用いるべき。

と

い

ねはんぎよう

もん

ねはんぎよう

ぎようじゃ

そうじよう

問うて云わく、涅槃経の文には「涅槃経の行者は爪上」

とううんぬん

なんじ

ぎ

ほけきよう

とううんぬん

等云々。汝が義には「法華経」等云々、いかん。

こた

い

ねはんぎよう

い

ほつけ

なか

とう

答えて云わく、涅槃経に云わく「法華の中のごとし」等

うんぬん

みようらくだいし

だいきようみずか

ほつけ

さ

ごく

云々。妙楽大師云わく「大経自ら法華を指して極となす」

とううんぬん

だいきよう

もう

ねはんぎよう

ねはんぎよう

ほけきよう

ごく

等云々。大経と申すは涅槃経なり。涅槃経には法華経を極

さ

そうろう

ねはんしゆう

ひと

ねはんぎよう

ほけきよう

と指して候なり。しかるを、涅槃宗の人の涅槃経を法華経

まさ

もう

しゅ

しよじゅう

げろう

じようろう

に勝ると申せしは、主を所従といい、下郎を上郎とい

ひと

ねはんぎよう

もう

ほけきよう

読

もう

し人なり。涅槃經をよむと申すは、法華經をよむを申すな

たと

けんじん

こくしゅ

おも

もの

われ

下

り。譬えば、賢人は、国主を重んずる者をば、我をさぐれ

よろこ

ねはんぎよう

ほけきよう

さ

われ

讃

ひと

ども悦ぶなり。涅槃經は、法華經を下げて我をほむる人を

かたき

憎

たも

ば、あながちに敵とにくませ給う。

ためし

し

けごんぎよう

かんぎよう

だいにちきようとう

この例をもつて知るべし。華嚴經・觀經・大日經等を

読

ひと

ほけきよう

おと

かれがれ

きようぎよう

こころ

よむ人も、法華經を劣るとよむは、彼々の經々の心には

背

し

ほけきよう

ひと

そむくべし。これをもつて知るべし。法華經をよむ人の、

きよう

しん

しよきよう

とくどう

この經をば信ずるようなれども諸經にても得道なると

思

きよう

ひと

おもうは、この経をよまぬ人なり。

れい

かじようだいし

ほつけげん

もう

ふみじつかんつく

ほけきよう

例せば、嘉祥大師は法華玄と申す文十卷造つて法華経を

讃

みようらく

彼

責

い

そし

なか

あ

ほめしかども、妙楽かれをせめて云わく「毀りその中に在

ぐさん

な

とううんぬん

ほけきよう

破

ひと

り。いかんぞ弘讃と成さん」等云々。法華経をやぶる人な

かじよう

お

てんだい

仕

ほけきよう

読

り。されば、嘉祥は落ちて天台につかいて法華経をよまず。

われきよう

あくどう

免

しちねん

「我経をよむならば、悪道まぬかれがたし」とて、七年ま

み

はし

たま

じおんだいし

げんざん

もう

ほけきよう

讃

で身を橋とし給いき。慈恩大師は玄賛と申して法華経をほ

ふみじつかん

でんぎようだいし 責

い

ほけきよう

ほ

むる文十卷あり。伝教大師せめて云わく「法華経を讃むと

かえ

ほつけ

こころ

ころ

とううんぬん

いえども、還つて法華の心を死す」等云々。これらをもつ

思

ほけきよう

読

さんたん

ひとびと

なか

むけんじごく

ておもうに、法華經をよみ讚歎する人々の中に、無間地獄は

おほあ

多く有るなり。

かじよう じおん

いちじようひぼう

ひと

こうぼう

じかく

ちしよう

嘉祥・慈恩すでに一乗誹謗の人ぞかし。弘法・慈覚・智証、

ほけきようべつによ

ひと

あに法華經蔑如の人にあらずや。

かじようだいし

こう

はい

しゅ

さん

み

はし

嘉祥大師のごとく、講を廃し衆を散じて身を橋となせし

いぜん

ほけきようひぼう

つみ

消

ふきようきようき

も、なおや已前の法華經誹謗の罪やきえざるらん。不輕輕毀

もの

ふきようぼさつ

しんぷくずいじゅう

じゅうざい

残

の者は不輕菩薩に信伏随従せしかども、重罪いまだのこ

せんこうあび

お

こうぼう

じかく

ちしようとう

りて千劫阿鼻に堕ちぬ。されば、弘法・慈覚・智証等は、

翻

こころ

ほけきよう

読

たといひるがえす心ありとも、なお法華經をよむならば

じゆうざい 消

況

翻

こころ

重罪きえがたし。いおうや、ひるがえる心なし。また

ほけきよう うしな

しんこんきよう

ちゆうや

おこな

ちようぼ

でんぼう

法華経を失い、真言教を昼夜に行い、朝暮に伝法せしを

や。

せしんぼさつ

めみようぼさつ

しよう

だい

は

つみ

世親菩薩・馬鳴菩薩は、小をもつて大を破せる罪をば、

した き

せしんぼさつ

ぶっせつ

あごんきよう

舌を切らんとこそせしか。世親菩薩は仏説なれども阿含経

戯

した

うえ

置

誓

めみようぼさつ

をばたわぶれにも舌の上におかじとちかい、馬鳴菩薩は

さんげ

きしんろん

造

しようじよう

破

たま

懺悔のために起信論をつくりて小乗をやぶり給いき。

かじようだいし てんだいだいし

しよう

たてまつ

ひやくよにん

ちしや

まえ

嘉祥大師は天台大師を請じ奉つて、百余人の智者の前に

ごたい

じ

投

へんしん

汗

流

くれない

涙

して五体を地になげ、遍身にあせをながし、紅のなんだを

流

いま

でし

み

ほけきよう

講

でし

ながして、「今よりは弟子を見じ。法華經をこうぜじ。弟子

おもて

守

ほけきよう

読

わ

ちから

の面をまぼり法華經をよみたてまつれば、我が力のこの

きよう

しr

似

てんだい

こうそう

ろうそう

經を知るににたり」とて、天台よりも高僧・老僧にておわ

ひと

見

負

かわ

超

せしが、わざと人のみるとき、おいまいらせて河をこえ、

高座

近

背

中

乗

こうざ

登

こうざにちかづきて、せなかにのせまいらせて高座にのぼ

けつく

ごりんじゆう

のち

ずい

こうてい

参

たま

せたてまつり、結句、御臨終の後には隋の皇帝にまいらせ給

しょうに

はは

後

あし

摺

泣

たま

いて、小児が母におくれたるがごとくに足をすりてなき給

いしなり。

かじようだいし

ほつけげん

み

甚

ほけきよう

ぼう

しよ

嘉祥大師の法華玄を見るに、いとう法華經を謗じたる疏

ほけきよう　しよだいじようきよう　もん　せんじん

にはあらず。ただし、法華經と諸大乘經とは門は浅深あ

こころ　ひと　書　そうら　ほうぼう　ほんぽん

れども心は一つとかきてこそ候え。これが謗法の根本に

そうろう　けこん　ちようかん　しんこん　ぜんむい　だいにちきよう　ほけきよう

て候か。華嚴の澄觀も真言の善無畏も、大日經と法華經

り　ひと　書　そうら　かじよう　失

とは理は一つとこそかかれて候え。嘉祥とがあらば、

ぜんむい　のが

善無畏も脱れがたし。

ぜんむいさんぞう　ちゆうてん　こくしゆ　くらい　捨　たこく

されば、善無畏三蔵は中天の国主なり。位をすてて他国

至　しゆしよう　しようだい　ににん　会　ほけきよう　受　ひやくせん

にいたり、殊勝・招提の二人にあいて法華經をうけ、百千

いし　とう　た　ほけきよう　ぎようじや　見

の石の塔を立てしかば、法華經の行者とこそみえしか。し

だいにちきよう　なら　ほけきよう　だいにちきよう

かれども、大日經を習いしよりこのかた、法華經を大日經

おと

思

はじ

甚

ぎ

に劣るとやおもいけん、始めはいとうその義もなかりける

かんど

げんそうこうてい

し

てんだいしゅう

嫉

が、漢土にわたりて玄宗皇帝の師となりぬ。天台宗をそね

おも

こころ付

たま

とんし

み思う心つき給いけるかのゆえに、たちまちに頓死して、

ににん

ごくそく

くろがね

なわなな

付

えんまおうきゅう

至

二人の獄卒に鉄の縄七つつけられて閻魔王宮にいたりぬ。

いのち

尽

言

帰

ほけきようほうぼう

命いまだつきずといいてかえされしに、法華経謗法とや

思

しんごん

かんねん

いん

しんごんとう

投

捨

ほけきよう

おもいけん、真言の観念・印・真言等をばなげすてて、法華経

いま

さんがい

もん

とな

なわ

き

帰

たま

の「今この三界は」の文を唱えて、縄も切れ、かえされ給い

あめ

祈

仰

付

ぬ。また雨のいのりをおおせつけられたりしに、たちまち

あめ

ふ

おおかげふ

くに

破

けつくし

に雨は下りたりしかども、大風吹いて国をやぶる。結句死し

たま

でしとうあつ

りんじゆう

様

讃

給いてありしには、弟子等集まつて臨終いみじきようをほ

むけんだいじよう お

めしかども、無間大城に堕ちにき。

と い なに 知

問うて云わく、何をもつてかこれをしる。

こた い か でん み い いまい いぎよう み

答えて云わく、彼の伝を見るに、云わく「今畏の遺形を觀

ようや しゆくしよう くわ こくひいんいん ほね あらわ

るに、漸く縮小を加え、黒皮隠々として骨それ露なり」

とううんぬん か でしとう しご じごく そう あらわ 知

等云々。彼の弟子等は死後に地獄の相の顯れたるをしらず

とく 挙 思 書 著 ふで い とが

して徳をあぐなどおもえども、かきあらわせる筆は畏が失

書 し み 漸 縮 小

をかけり。死してありければ、身ようやくつづまりちいさ

かわ 黒 ほね 露 とううんぬん ひとし のちいろ くろ

く、皮はくろし、骨あらわなり等云々。人死して後色の黒き

じごく ぎょう さだ

ぶつだ きんげん

ぜんむいさんぞう

は地獄の業と定むることは、仏陀の金言ぞかし。善無畏三蔵

じごく ぎょう 何 ごと

ようしよう

くらい

捨

だいいち

の地獄の業はなに事ぞ。幼少にして位をすてぬ。第一の

どうしん

がつしごじゅうよかこく しゆぎよう

じひ

あま

かんど

道心なり。月氏五十余箇国を修行せり。慈悲の余りに漢土

渡

てんじく しんたん にほん いちえんぶだい

うち

しんごん

つた

にわたれり。天竺・震旦・日本、一閻浮提の内に真言を伝え、

れい 振

ひと とく

じごく

お

鈴をふる。この人の徳にあらずや。いかにして地獄に堕ち

ごしよう

思

ひとびと

おんたず

けると、後生をおもわん人々は御尋ねあるべし。

こんごうちさんぞう

なんてんじく

だいおう

たいし

こんごうちようきよう

また金剛智三蔵は南天竺の大王の太子なり。金剛頂経

かんど

渡

とく

ぜんむい

たが

し

を漢土にわたす。その徳、善無畏のごとし。また互いに師と

こんごうちさんぞう

ちよくせん

あめ

いの

なれり。しかるに、金剛智三蔵、勅宣によつて雨の祈りあ

しちにち

うち

あめふ

てんしおお

よろこ

たも

りしかば、七日が中に雨下る。天子大いに悦ばせ給うほど

おおかぜふ

きた

おうしんとう

興

醒

たま

つか

に、たちまちに大風吹き来る。王臣等きようさめ給いき。使

お

たま

述

とど

いをつけて追わせ給いしかども、ところのべて留まりしな

けつく

ひめみや

ごしきよ

祈

り。結句は姫宮の御死去ありしに、いのりをなすべしとて、

み

しろ

てんじよう

ふた

おなごしちさい

たきぎ

詰

込

身の代に殿上の二りの女子七歳になりしを薪につみこめ

や
ころ

むざん

覚

て焼き殺せしことこそ、無慙にはおぼゆれ。しかれども、

ひめみや

生

返

たま

姫宮もいきかえり給わず。

ふくうさんぞう

こんごうち

がつし

おん

共

不空三蔵は金剛智と月支より御ともせり。これらのこと

ふしん

思

い

ち

にゆうめつ

のち

がつし

かえ

を不審とやおもいけん、畏と智と入滅の後、月氏に還つて

りゆうち

あ

たてまつ

しんごん

なら

直

てんだいしゅう

きぶく

竜智に値い奉り、真言を習いなおし天台宗に帰伏してあ

こころ

かえ

み

帰

あめ

りしが、心ばかりは帰れども、身はかえることなし。雨の

おん 祈

承

みつか

もう

あめふ

てんし

御いのりうけたまわたりしが、三日と申すに雨下る。天子

よろこ

たま

われ

おんふせ引

たも

しゆゆ

悦ばせ給いて、我と御布施ひかせ給う。須臾ありしかば、

おおかせお

くだ

だいら

ふ

破

うんかくげつけい

しゆくしよ

大風落ち下つて内裏をも吹きやぶり、雲客月卿の宿所、

いっしよ

見

てんしおお

おどろ

一所もあるべしともみえざりしかば、天子大いに驚いて

せんじ

かせ

止

ふ

宣旨なりて「風をとどめよ」。しばらくありてはまた吹き、

ふ

すうじつ

あいだ止

けつく

つか

また吹きせしほどに、数日が間やむことなし。結句は使い

お

かせ

止

をつけて追つてこそ風もやみてありしか。

さんにん あくふう かんど にほん いっさい しんごんし おおかぜ

この三人の悪風は、漢土・日本の一切の真言師の大風な

い ぶんえいじゅういちねんしがつじゅうにち

り。さにてあるやらん、去ぬる文永十一年四月十二日の

おおかぜ あみだどう かがほういん とうじだいいち ちしや あめ 祈

大風は、阿弥陀堂の加賀法印、東寺第一の智者の雨のいのり

ふ ぎやくふう ぜんむい こんごうち ふくう あくほう

に吹きたりし逆風なり。善無畏・金剛智・不空の悪法をす

違 つた こころ 憎 こころ

こしもたがえず伝えたりけるか。心にくし、心にくし。

こうぼうだいし い てんちようがんねん にがっだいかんぼつ

弘法大師は、去ぬる天長元年の二月大旱魃のありしに、

さき しゅびんきう しちにち うち あめ ふ きようじゅう

先には守敏祈雨して七日が内に雨を下らす。ただ京中に

下 いなか 注 つぎ こうぼうう と いちしちにち あまけ

ふりて田舎にそそがず。次に弘法承け取って一七日に雨気

にしちにち くも さんしちにち もう てんし

なし。一七日に雲なし。三七日と申せしに、天子より

わけのまつな ししや ごへい しんせんえん 進

和氣真綱を使者として御幣を神泉苑にまいらせたりしかば、

あめふ さんにち こうぼうだいし でしとう あめ

雨下ること三日、これをば弘法大師ならびに弟子等この雨

奪 取 わ あめ いま しひやくよねん こうぼう あめ

をうばいとり、我が雨として今に四百余年、弘法の雨とい

じかくだいし ゆめ にちりん 射 こうぼうだいし だいもうご い

う。慈覚大師の夢に日輪をいしと、弘法大師の大妄語に云わ

こうにんくねんはる だいえき 祈 よなか だいにちりんしゆつげん

く「弘仁九年春、大疫をいのりしかば、夜中に大日輪出現

うんぬん じようこう このかた じゆうこう だいく げん いじよう

せり」と云々。成劫より已来、住劫の第九の滅、已上

にじゆうくこう あいだ にちりんよなか い

二十九劫が間に、日輪夜中に出ずということなし。

じかくだいし ゆめ にちりん 射 ないてんごせん しちせん げてん

慈覚大師は夢に日輪をいるという。内典五千・七千、外典

さんぜんよかん にちりん 夢 見 きちむ あ

三千余卷に、日輪をいるとゆめにみるは吉夢ということ有

りやいなや。しゅら たいしやく 怨 修羅は帝釈をあだみて日天をいたてまつる。につてん 射

その矢かえりて我が眼にたつ。や 反 わ まなこ 立 いん ちゆうおう につてん まと 射 殷の紂王は日天を的にい

て身を亡ぼす。み ほろ にほん じんむてんのう おんとき とみのおき いつせのみこと 日本の神武天皇の御時、度美長と五瀬命と

合戦ありしに、命の手に矢たつ。かつせん みこと て や 立 みこと い われ 命の云わく「我はこれ

日天の子孫なり。ひのかみ うまご ひ む たてまつ ゆみ 引 ひのかみ 日に向かい奉つて弓をひくゆえに、日天

のせめをこうぼれり」と云々。責 被 うんぬん あじやせおう ほとけ き 阿闍世王は仏に帰しまいら

せて、内裏に返つてぎよしんなりしが、おどろいて諸臣に向だいら かえ 御 寝 ち お 夢 見 しょしん む

かつて云わく「日輪、天より地に落つとゆめにみる」。い にちりん てん ち お 夢 見 しょしん 諸臣

云わく「仏の御入滅か」云々。いとけ ごにゆうめつ うんぬん しゅばっだら 夢 須跋陀羅がゆめ、またかく

のごとし。

わ くに こと 忌 夢 我が国は殊にいむべきゆめなり。神をば天照という。国 くに

にほん ば 日本という。また教主釈尊をば日種と申す。摩耶夫人、

ひ 孕 夢 日をはらむとゆめにみて、もうけ給える太子なり。慈覚大師

だいにちによらい えいざん た しやかぶつ 捨 しんごん さんぶきよう

は大日如来を叡山に立てて釈迦仏をすて、真言の三部経を

崇 ほけきよう さんぶ かたき ゆめしゆつげん

あがめて法華経の三部の敵となりしゆえに、この夢出現

せり。

れい かんど ぜんどう はじ みつしゆう みようしよう もの

例せば、漢土の善導が、始めは密州の明勝といいし者

あ ほけきよう 読 のち どうしやく あ

に値って法華経をよみたりしが、後には道綽に値って

ほけきよう 捨 かんぎよう よ しよ ほけきよう せん

法華經をすて觀經に依つて疏をつくり、法華經をば「千の

なか ひと な ねんぶつ じゆう すなわ じゆうしよう ひやく すなわ

中に一りも無し」、念仏をば「十は即ち十生じ、百は即

ひやくしよう さだ ぎ じよう あみだぶつ

ち百生ず」と定めて、この義を成ぜんがために阿弥陀仏

みまえ きせい ぶつ い かな まいよ

の御前にして祈誓をなす、「仏意に叶うやいなや」。「毎夜、

ゆめ なか つね ひと そうあ きた しじゆ うんぬん ないし

夢の中に常に一りの僧有つて、来つて指授す」と云々。乃至

もつば きようぼう ないし かんねんほうもんぎよう とううんぬん

「一ら經法のごとくせよ」。乃至「觀念法門經」等云々。

ほけきよう ほう き ひと じようぶつ

法華經には「もし法を聞くことあらば、一りとして成仏せ

ぜんどう せん なか ひと な とううんぬん

ざることなけん」。善導は「千の中に一りも無し」等云々。

ほけきよう ぜんどう すいか ぜんどう かんぎよう じゆう すなわ

法華經と善導とは水火なり。善導は、觀經をば「十は即

じゅうしょう

ひやく

すなわ

ひやくしょう

むりようぎきよう

い

ち十生じ、百は即ち百生ず」。無量義経に云わく、

かんぎよう

しんじつ

あらわ

とううんぬん

むりようぎきよう

ようりゆうぼう

観経は「いまだ真実を顕さず」等云々。無量義経と楊柳房

てんち

あみだぶつ

そう

な

きた

まこと

とは天地なり。これを阿弥陀仏の僧と成つて来つて「真な

しょう

まこと

あみだぶつ

り」と証するは、あに真事ならんや。そもそも阿弥陀仏は

ほけきよう

ぎ

きた

した

い

たま

かんのん

法華経の座に来て舌をば出だし給わざりけるか。観音・

せいし

ほけきよう

ぎ

勢至は法華経の座にはなかりけるか。

思

じかくだいし

おんゆめ

禍

これをもつておもえ、慈覚大師の御夢はわざわいなり。

と

い

こうぼうだいし

しんぎようひけん

い

とき

こうにん

問うて云わく、弘法大師の心経秘鍵に云わく「時に弘仁

くねんはる

てんかだいえき

こうていみずか

おうごん

ひったん

そ

九年春、天下大疫す。ここに皇帝自ら黄金を筆端に染め、

こんし そうしよう にぎ はんによしんぎよういつかん しよしや たてまつ

紺紙を爪掌に握つて、般若心経一卷を書写し奉りたも

よ こうどく せん のつと きようし しゆう つづ

う。予、講読の撰に範り、経旨の宗を綴る。いまだ結願

ことば は そせい やからみち たたず よるへん にっこう

の詞を吐かざるに、蘇生の族途にイミ、夜変じて日光

かつかく ぐしん かいとく こんりん ごしんりき

赫々たり。これ愚身の戒徳にあらず。金輪の御信力のなす

じんしや もう やから ひけん じゆ

ところなり。ただ神舎に詣でん輩のみ、この秘鍵を誦し

たてまつ むかし よ じゆぶせつぼう むしろ ばい まのあた じんもん

奉れ。昔、予、鷲峰説法の筵に陪して、親りその深文

き ぎ たつ とううんぬん

を聞きたてまつる。あにその義に達せざらんや」等云々。

くじやくきようおんぎ い こうぼうだいしきちよう のち しんごんしゆう

また孔雀経音義に云わく「弘法大師帰朝の後、真言宗を

た ほつ しよしゆうちようてい ぐんしゆう そくしんじようぶつ ぎ うたが

立てんと欲す。諸宗朝廷に群集して即身成仏の義を疑

う。大師、智拳印を結んで南方に向かうに、面門にわかにか
だいし ちけんいん むす なんぽう む めんもん ひら

いて金色の毘盧遮那と成る。即便ち本体に還歸す。入我・
こんじき びるしやな な すなわ ほんたい げんき にゆうが

がにゆう そくしんとんしろう うたが ひしやくねん

我入のこと、即身頓証の疑い、この日釈然たり。しかる
しんごん ゆが しゅう ひみつまんだら どう か とき こんりゆう

に真言・瑜伽の宗、秘密曼荼羅の道、彼の時よりして建立
い とき しよしゅう がくと だいし き はじ

す」。また云わく「この時に諸宗の学徒、大師に歸して始め
しんごん え しょうやく しゅうがく さんろん どうしろう ほつそう げんにん

て真言を得て請益し習学す。三論の道昌、法相の源仁、
けごん どうゆう てんだい えんちようとう みな たぐ

華嚴の道雄、天台の円澄等、皆その類いなり」。
こうぼうだいしでん い きちようはんしゅう ひ ほつがん い わ

弘法大師伝に云わく「帰朝泛舟の日、発願して云わく『我
まな きようほう かんろう じ あ さんこ

が学ぶところの教法、もし感応の地有らば、この三鈷その
まな きようほう かんろう じ あ さんこ

ところ いた

にほん かた む

さんこ な あ

処に到るべし』。よつて、日本の方に向かつて三鈷を抛げ上

はる

と

くも

い

じゆうがつ

きちよう

うんぬん

い

ぐ。遙かに飛んで雲に入る。十月に帰朝す」云々。また云

こうやさん

もと

にゆうじよう

ところ

し

ないしか

かいじよう

わく「高野山の下に入定の所を占む乃至彼の海上の

さんこ

いまあら

あ

とううんぬん

三鈷、今新たにここに在り」等云々。

だいし

とくむりよう

りよう

さん

しめ

この大師の徳無量なり。その両・三を示す、かくのごと

だいとく

ひと

しん

くの大徳あり。いかんがこの人を信ぜずして、かえつて

あびじごく

お

阿鼻地獄に墮つといわんや。

こた

い

よ

あお

しん

たてまつ

答えて云わく、予も仰いで信じ奉ること、かくのごと

いにしえ

ひとびと

ふ

かしぎ

とく

ぶつぼう

し。ただし、古の人々も不可思議の徳ありしかども、仏法

じやしよう

依

げどう

ごうが

みみ

の邪正はそれにはよらず。外道が、あるいは恒河を耳に

じゆうにねんとど

たいかい

吸干

にちがつ

て

十二年留め、あるいは大海をすいほし、あるいは日月を手に

握

しゃくし

ごよう

にぎり、あるいは釈子を牛羊となしなんどせしかども、い

だいまん

起

しょうじ

ごう

よいよ大慢をおこして生死の業とこそなりしか。これをば、

てんだい

みようり

もと

けんあい

ま

しゃく

天台云わく「名利を邀め、見愛を増す」とこそ釈せられて

そうら

こうたく

あめ

ふ

しゆゆ

はな

かん

候え。光宅がたちまちに雨を下らし、須臾に花を感じしを

みようらく

かんのう

り

かな

も、妙楽は「感応かくのごときも、なお理に称わず」とこ

書

そうら

てんだいだいし

ほけきよう

読

しゆゆ

そかかれて候え。されば、天台大師の法華経をよみて須臾

かんう

ふ

でんぎようだいし

さんにち

うち

かんろ

あめ

下

に甘雨を下らせ、伝教大師の三日が内に甘露の雨をふらし

ておわせしも、それをもつて仏意に叶うとはおおせられず。
ぶつ い かな 仰

弘法大師いかなる徳ましますとも、法華經を戲論の法と定
こうぼうだいし とく ほけきよう けろん ほう さだ

め、釈迦仏を無明の辺域とかかせ給える御ふでは、智慧
しやかぶつ むみよう へんいき 書 たま おん 筆 ちえ

かしこからん人は用いるべからず。
賢 ひと もち

いかにいおうや、上にあげられて 候徳どもは不審ある
況 かみ 挙 そうろうとく ふしん

ことなり。

「弘仁九年の春、天下大疫す」等云々。春は九十日、い
こうにんくねん はる てんかだいえき とううんぬん はる くじゆうにち

ずれの月、いずれの日ぞへこれ一。また弘仁九年には大疫
つき ひ いち こうにんくねん だいえき

ありけるかへこれ二。また「夜變じて日光赫々たり」と云々。
に よるへん につこうかつかく うんぬん

このこと第一の大事なり。弘仁九年は嵯峨天皇の御宇なり。

さしうしきのさん

左史・右史の記に載せたりやへこれ三。たとい載せたりと

しんじょうこうにじゅうこうじゅうこうくこういじょう

も、信じがたきことなり。成劫二十劫・住劫九劫、已上

にじゅうくこうあいだなてんぺんよなかにちりんしゅつげん

二十九劫が間に、いまだ無き天変なり。夜中に日輪の出現

によらいいちだいしょうぎよう見みらい

せることいかん。また如来一代の聖教にもみえず。未来に

よなかにちりんいさんこうごていさんぷんごてんの

夜中に日輪出ずべしとは、三皇五帝、三墳五典にも載せず。

ぶつきようげんこうふたひみつひないし

仏經のぐときんば、滅劫にこそ二つの日、三つの日、乃至

ななひいみひる

七つの日は出ずべしとは見ゆれども、かれは昼のことぞか

よるひしゅつげんとうざいほくさんぼうないげ

し。夜、日出現せば、東西北の三方はいかん。たとい内外

の典に記せずとも、現に弘仁九年の春、いづれの月、いづ

れの日、いづれの夜の、いづれの時に日出ずという公家・

諸家・叡山等の日記あるならば、すこし信ずるへんもや。

次下に「昔、予、鷲峰説法の筵に陪して、親りその深文

を聞きたてまつる」等云々。この筆を人に信ぜさせしめん

がためにかまえ出だす大妄語か。されば、靈山にして

「法華経は戯論、大日経は真実」と仏の説き給いけるを、

阿難・文殊が誤って妙法華経をば真実とかけるか、いかん。

いうにかいなき姪女、破戒の法師等が歌をよみて雨らす雨

を三七日まで下らさざりし人は、かかる徳あるべしやへこ
れ四〇。

孔雀經音義に云わく「大師、智拳印を結んで南方に向か
うに、面門にわかを開いて金色の毘盧遮那と成る」等云々。

これまたいずれの王、いずれの年時ぞ。漢土には建元を初め
とし、日本には大宝を初めとして、緇素の日記、大事には必
ず年号のあるか。これほどの大事に、いかでか王も臣も年号

も日時もなきや。

また次に云わく「三論の道昌、法相の源仁、華嚴の道雄、

てんどう えんちよう とううんぬん

えんちよう じゃつこうだいし てんだいだいに

天台の円澄」等云々。そもそも円澄は寂光大師、天台第二

ざす ときなん だいいち ざす ぎしん こんぼん でんぎようだいし

の座主なり。その時何ぞ第一の座主・義真、根本の伝教大師

め えんちよう てんだいだいに ざす でんぎようだいし

をば召さざりけるや。円澄は天台第二の座主、伝教大師の

みでし こうぼうだいし でし め

御弟子なれども、また弘法大師の弟子なり。弟子を召さん

さんろん ほつそう けごん てんだい でんぎよう ぎしん ににん

よりは、三論・法相・華嚴よりは、天台の伝教・義真の二人

め につき い しんごん ゆが

を召すべかりけるか。しかもこの日記に云わく「真言・瑜伽

しゅう ひみつまんだら か とき こんりゅう とううんぬん

の宗、秘密曼荼羅、彼の時よりして建立す」等云々。こ

ふで でんぎよう ぎしん べごんしろう 見 こうぼう へいぜいてんのう

の筆は伝教・義真の御存生かとみゆ。弘法は平城天皇の

だいどうにねん こうにんじゅうさんねん さか しんごん 弘 ひと

大同二年より弘仁十三年までは盛んに真言をひろめし人

なり。ときその時はこの二人現におわします。ににんげんまた義真は天長ぎしん てんちよう

じゆうねん

十年までおわせしかば、その時まで弘法の真言はひろまら

ふしん

くじやくきよう

しよ

こうぼう

ざりけるか。かたがた不審あり。孔雀経の疏は、弘法の

でし しんぜい

じき

しん

じゃけん

もの

くげ

弟子・真済が自記なり。信じがたし。また邪見の者か。公家・

しよけ

えんちよう

き

引

どうしよう

げんにん

どうおう

諸家・円澄の記をひかるべきか。また道昌・源仁・道雄の

き たず

記を尋ぬべし。

めんもん

ひら

こんじき

びるしやな

な

とううんぬん

「面門にわかにかいて金色の毘盧遮那と成る」等云々。

めんもん

くち

くち

ひら

みけんひら

書

面門とは口なり。口の開けたりけるか、眉間開くとかかん

あやま

めんもん

謀 しよ

としけるが、誤って面門とかけるか。ぼう書をつくるゆえ

に、かかるあやまりあるか。誤

だいし ちけんいん むす なんぼう む

めんもん

ひら

「大師、智拳印を結んで南方に向かうに、面門にわかにか

こんじき ぶるしやな な どううんぬん ねはんぎよう ご い

いて金色の毘盧遮那と成る」等云々。涅槃經の五に云わく

かしよう ほとけ もう もう せそん われいま ししゆ ひと

「迦葉、仏に白して言さく『世尊よ。我今この四種の人に

よ なに ゆえ くしらきよう なか ほとけ

依らず。何をもつての故に。瞿師羅經の中のごとし。仏、

くしら と てん ま ぼん はえ

瞿師羅のために説きたまわく、もし天・魔・梵、破壊せん

ほと へん ほとけ かたち

さんじゆうにそう

と欲するがために変じて仏の像となり、三十二相

はちじっしゆこう ぐそく そうこん えんこういちじん めんぶえんまん

八十種好を具足し莊嚴し、円光一尋にして面部円満なるこ

つき じようみよう みけん ごうそうしろ

かせつ

と、なお月の盛明なるがごとく、眉間の毫相白きこと珂雪

に踰え乃至左の脇より水を出だし、右の脇より火を出だす』

こ
ないしひだり
わき
みぎ
わき
ひ
い

と」等云々。また六の卷に云わく「仏、迦葉に告げたまわ

とううんぬん
ろく
まき
い
ほとけ
かしよう
つ

われはつねはん

ないしのち

まはじゆんようや

まき

わ

しようほう

く『我般涅槃して乃至後、この魔波旬漸く当に我が正法を

そえ

ないしけ

あらかん

み

ほとけ

しきしん

な

沮壞すべし乃至化して阿羅漢の身および仏の色身と作り、

まおう

うろ

かたち

むろ

み

な

わ

しようほう

魔王この有漏の形をもつて無漏の身と作し、我が正法を

やぶ

とううんぬん

壊らん』と」等云々。

こうぼうだいし

ほけきよう

けこんぎよう

だいにちきよう

たい

けろん

とう

弘法大師は法華経を華嚴経・大日経に対して「戲論」等

うんぬん

ぶつしん

げん

ねはんぎよう

ま

うろ

かたち

云々。しかも仏身を現ず。これ涅槃経には「魔、有漏の形

ほとけ

わ

しようほう

しる

たも

をもつて仏となつて、我が正法をやぶらん」と記し給う。

ねはんぎよう

しょうほう

ほけきよう

ゆえ

きよう

つぎしも

もん

い

涅槃經の「正法」は法華經なり。故に、經の次下の文に云

ひさ

じようぶつ

い

ほつけ

なか

わく「久しくすでに成仏す」。また云わく「法華の中のご

とううんぬん

しやか

たほう

じつぽう

しよぶつ

いつさいきよう

たい

とし」等云々。釈迦・多宝・十方の諸仏は、一切經に対し

ほけきよう

しんじつ

だいにちきようとう

いつさいきよう

ふしんじつ

とううんぬん

て「法華經は真実、大日經等の一切經は不真実」等云々。

こうぼうだいし

ぶつしん

げん

けごんぎよう

だいにちきよう

たい

ほけきよう

弘法大師は仏身を現じて、華嚴經・大日經に対して「法華經

けろん

とううんぬん

ぶつせつ

実

こうぼう

てんま

は戲論」等云々。仏説まことならば、弘法は天魔にあらず

や。

さんこ

こと

ふしん

かんど

ひと

にほん

きた

また三鈷のこと、殊に不審なり。漢土の人の日本に来つ

掘出

しん

いぜん

ひと

遣

埋

てほりいだすとも信じがたし。已前に人をやつかわしてう

ずみけん。いおうや、弘法は日本の人。かかる誑乱その数多し。
況 こうぼう にほん ひと おうらん すうおお

これらをもつて仏意に叶う人の証拠とはしりがたし。
ぶつ い かな ひと しょうこ 知

されば、この真言・禅宗・念仏等ようやくこうなり来る
しんごん ぜんしゅう ねんぶつとう 漸 きた

ほどに、人王第八十二代尊成・隠岐法皇、権大夫殿を失わ
にんのうだいはちじゅうにだいたかひら おきのほうおう ごんのだいぶどの うしな

んと年ごろはげませ給いけるゆえに、国主なれば、なにと
ねん 励 たま こくしゅ

なくとも師子王の兎を伏するがごとく、鷹の雉を取るよう
し しおう うさぎ ふく たか きじ と

にこそあるべかりし上、叡山・東寺・園城・奈良七大寺・
うえ えいざん とうじ おんじょう ならしちだいじ

てんしやうだいじん しょうはちまん さんのう かも かすがとう すうねん あいだ

天照太神・正八幡・山王・賀茂・春日等に数年が間、あ

じようぶく

かみ もう

たま

ににちさんにち

るいは調伏、あるいは神に申させ給いしに、二日三日だに

支

さどのくに

あわのくに

おきのくにとう

流

う

もささえかねて、佐渡国・阿波国・隠岐国等にながし失せ

つい

隠

たま

じようぶく

じようしゅ

おむろ

とうじ

て、終にかくれさせ給いぬ。調伏の上首・御室は、ただ東寺

替

まなこ

愛

たま

をかえらるるのみならず、眼のごとくあいせさせ給いし

だいいち

てんどう

せいたか

くびき

じようぶく

験

第一の天童・勢多伽が頸切られたりしかば、調伏のしるし

げんじやく おほんにん

み

そうら

還著於本人のゆえとこそ見え候え。これはわずかのこと

のちさだ

にほん

こくしん

ばんみんいちにん

かわ

なり。この後定めて、日本の国臣・万民一人もなく、乾け

くさ

っ

ひ

はな

たいせん

崩

たに

埋

る草を積んで火を放つがごとく、大山のくずれて谷をうむ

わ

くにたこく

責

しゅつたい

るがごとく、我が国他国にせめらるること出来すべし。

にほんこく

なか

にちれんいちにん

知

言

このこと、日本国の中にただ日蓮一人ばかりしれり。いい

出

いん

ちゅうおう

ひかん

むね

裂

か

いだすならば、殷の紂王の比干が胸をさきしがごとく、夏

けつおう

りゅうほう

くび

き

だんみらおう

ししそんじや

の桀王の竜逢が頸を切りしがごとく、檀弥羅王の師子尊者

くび

は

じく

どうしよう

なが

ほう

が頸を刎ねしがごとく、竺の道生が流されしがごとく、法

どうさんぞう

火

印

焼

道三蔵のかなやきをやかれしがごとくならんずらんとは、

予

し

ほけきよう

われ

しんみよう

あい

かねて知りしかども、法華経には「我は身命を愛せず、た

むじようどう

お

説

ねはんぎよう

しんみよう

だ無上道を惜しむのみ」ととかれ、涅槃経には「むしろ身命

うしな

おし

かく

諫

たま

こんどいのち

惜

を喪うとも教えを匿さざれ」といさめ給えり。今度命をお

よ

ほとけ

成

よ

しむならば、いつの世にか仏になるべき、またいかなる世

ふ ぼ ししやう

救 たてまつ

思 き

にか父母・師匠をもすくい 奉 るべきと、ひとえにおもひ切

もう はじ

あん 違

ところ 追

つて申し始めしかば、案にたがわず、あるいは所をおい、

罵

打

きず

被

あるいはのり、あるいはうたれ、あるいは疵をこうぶるほ

い

こうちやうがんねんかのととりごがつじゆうににち

ごかんき

被

どに、去ぬる弘長元年辛酉五月十二日に御勘気をこうぶ

いずのくにいとう

流

おな

こうちやうさんねんみずのとい

りて伊豆国伊東にながされぬ。また同じき弘長三年癸亥

にがつにじゆうににち

許

二月二十二日にゆりぬ。

のち

ぼだいしんこうじやう

もう

その後、いよいよ菩提心強盛にして申せば、いよいよ

だいなん 重

おおかぜ

おおなみ

お

むかし

大難かさなること、大風に大波の起こるがごとし。昔の

ふきやうぼさつ

じやうもく

責

わ

み

抓

知

かくとく

不軽菩薩の杖木のせめも我が身につみしられたり。覚徳

びく かんぎぶつ まつ だいなん およ 覚 にほん

比丘が歡喜仏の末の大難もこれには及ばじとおぼゆ。日本

ろくじゅうろくかこく しまふた なか いちにちかたとき ところ 住

六十六箇国・島二つの中に、一日片時もいずれの所にすむ

様 いにしえ にひやくごじっかい たも にんにく

べきようもなし。古は二百五十戒を持つて忍辱なること

らうん じかい しょうにん ふる な ちしや

羅云のごとくなる持戒の聖人も、富楼那のごとくなる智者

にちれん あ あつく 吐 しょうじき ぎちよう

も、日蓮に値いぬれば悪口をはく。正直にして魏徴・

ちゅうじんこう けんじやとう にちれん み り 曲 ひ

忠仁公のごとくなる賢者等も、日蓮を見ては理をまげて非

行 況 せけん つね ひとびと いぬ 猿 見

とおこなう。いおうや、世間の常の人々は、犬のさるをみた

りようし しか 籠 似 にほんこく なか

るがごとく、獵師が鹿をこめたるにいたり。日本国の中に

いちにん ゆえ ひと

一人として「故こそあるらめ」という人なし。

どうり

ひと

ねんぶつ

もう

ひと

む

ねんぶつ

道理なり。人ごとに念仏を申す。人に向かうごとに念仏は

むけん

お

ひと

しんごん

たつと

しんごん

くに

無間に墮つというゆえに。人ごとに真言を尊む。真言は国

亡

あくほう

こくしゅ

ぜんしゅう

たつと

にちれん

てんま

をほろぼす悪法という。国主は禅宗を尊む。日蓮は天魔の

しよい

われ

まね

禍

ひと

罵

所為というゆえに。我と招けるわざわいなれば、人ののる

咎

いちにん

う

痛

をもとがめず。とがむとても一人ならず。打つをもいたま

もと

ぞん

み

惜

責

ず。本より存ぜしがゆえに。こう、いよいよ身もおしまずせ

ぜんそうすうひやくにん

ねんぶつしやすうせんにん

しんごんしひやくせんにん

めしかば、禅僧数百人・念仏者数千人・真言師百千人、

ぶぎよう

切

びと

切

あるいは奉行につき、あるいはきり人につき、あるいはきり

にようぼう

ごけ あまごぜんとう

むじん

女房につき、あるいは後家尼御前等について無尽の

ざんげんをなせしほどに、最後には「天下第一の大事。日本

こく うしな

じゆ詛

ほつし

こさいみようじどの

ごくらくじどの

国を失わんと呪そする法師なり。故最明寺殿・極楽寺殿を

むけんじごく お

もう

ほつし

おんたず

無間地獄に堕ちたりと申す法師なり。御尋ねあるまでもな

しゆゆ

くび

召

でしとう

くび

き

し。ただ須臾に頸をめせ。弟子等をばまた、あるいは頸を切

おんごく

遣

ろう

い

あま

り、あるいは遠国につかわし、あるいは籠に入れよ」と、尼

御前

怒

たま

おこな

ごぜんたちいからせ給いしかば、そのままに行われけり。

いさ

ぶんえいはちねんかのとひつじくがつじゆうににち

よ

さがみのくに

竜

くち

去ぬる文永八年辛未九月十二日の夜は相模国たつの口

き

にて切らるべかりしが、いかにしてやありけん、その夜はの

えち

着

じゆうさんにち

よ

許

びて依智というところへつきぬ。また十三日の夜はゆりた

りとどどめきしが、またいかにやありけん、さどの国まで

きょうき

き言

しかねん

ゆく。今日切る、あす切るといいしほどに、四箇年という

けつく い

ぶんえいじゅういちねんたいさいきのえいぬにがつ

じゅうしにち

に、結句は去ぬる文永十一年太歳甲戌二月の十四日に

許

おな

さんがつにじゅうろくにち

かまくら

い

おな

しがつ

ゆりて、同じき三月二十六日に鎌倉へ入る。同じき四月の

はちにち

へいのさえもんのじよう

げんざん

様

々

もう

八日、平左衛門尉に見参して、ようようのこと申したりし

なか

ことし

もうこ

いちじよう寄

もう

おな

ごがつ

中に、「今年は蒙古は一定よすべし」と申しぬ。同じき五月

じゅうににち

鎌

倉

出

やま

い

の十二日にかまくらをいでてこの山に入れり。これはひと

ふぼ

おん

ししyou

おん

さんぽう

おん

くに

おん

報

えに父母の恩・師匠の恩・三宝の恩・国の恩をほうぜんが

み

破

いのち

捨

やぶ

ために身をやぶり命をすつれども、破れざれば、さてこそ

そうら

けんじん

なら

みたびくに

諫

もち

候え。また賢人の習い、「三度国をいさむるに、用いずば

さんりん

交

さだ

例

山林にまじわれ」ということは、定まれるれいなり。

くどく

さだ

かみ

さんぼう

しも

ぼんてん

たいしやく

にちがつ

この功德は、定めて上は三宝より下は梵天・帝釈・日月

知

ふぼ

こどうぜんぼう

しやうりやう

たす

までもしろしめしぬらん。父母も故道善房の聖靈も扶か

たも

うたが

おも

もくれんそんじや

たす

り給うらん。ただし疑い念うことあり。目連尊者は扶けん

思

はは

しやうだいによ

がきどう

お

だいかくせ

とおもいしかども、母の青提女は餓鬼道に堕ちぬ。大覺世

そん
みこ

ぜんしやうびく

あびじごく

お

尊の御子なれども、善星比丘は阿鼻地獄へ堕ちぬ。これは

ちから

救

思

じごうじとくか

辺

救

力のまますくわんとおぼせども、自業自得果のへんはすく

いがたし。

こどうぜんぼう

甚

でし

にちれん

憎

思

故道善房は、いとう弟子なれば日蓮をばにくしとはおぼ

極

おくびよう

うえ

きよすみ

離

せざりけるらめども、きわめて臆病なりし上、清澄をはな

しゅう

ひと

じとうかげのぶ

恐

だいば

れじと執せし人なり。地頭景信がおそろしといい、提婆・

くぎやり

異

えんち

じつじよう

かみ

しも

い

脅

瞿伽利にことならぬ円智・実城が上と下とに居ておどせし

恐

愛

思

年

来

でし

をあながちにおそれて、いとおしとおもうとしごろの弟子

とう

捨

ひと

ごしよう

うたが

等をだにもすてられし人なれば、後生はいかんがと疑う。

ひと

みようが

かげのぶ

えんち

じつじよう

先

逝

ただし、一つの冥加には、景信と円智・実城とがさきにゆ

ひと

助

思

かれ

ほけきよう

きしこそ一つのたすかりとはおもえども、彼らは法華経の

じゅうらせつ

責

被

早

う

のち

しん

十羅刹のせめをかぼりてはやく失せぬ。後にすこし信ぜら

れてありしは、いさかいの後のちぎりきなり。ひるの

灯

何

うえ

のち

乳切木

昼

ともしびなにかせん。その上いかなることあれども、子・

でし

もの

ふびん

もの

ちから

ひと

弟子なんどいう者は不便なる者ぞかし。力なき人にもあら

佐渡

くに

行

いちど

訪

ざりしが、さどの国までゆきしに一度もとぶらわれざりし

しん

ことは、信じたるにはあらぬぞかし。

浅

か

ひと

ごしきよ

聞

それにつけてもあさましければ、彼の人の御死去ときく

ひ

い

みず

しず

走

立

行

おん

墓

には、火にも入り水にも沈み、はしりたちてもゆいて御はか

叩

きよう

いつかんどくじゆ

思

けんじん

をもたたいて経をも一卷読誦せんとこそおもえども、賢人

習

こころ

とんせい

思

ひと

とんせい

のならい、心には遁世とはおもわねども、人は遁世とこそ

思

おもうらんに、ゆえもなくはしり出いずるならば、末すえもとおら

ひと

ずと人おもうべし。されば、いかにおもうとも、まい参るべ

おのおのににん にちれん ようしろう ししろう

きにあらず。ただし各々二人は日蓮が幼少の師匠にておわ

ごんぞうそうじよう ぎようひようそうじよう でんぎようだいし おんし

します。勤操僧正・行表僧正の伝教大師の御師たりし

みでし たま にちれん かげのぶ

が、かえりて御弟子とならせ給いしがごとし。日蓮が景信に

怨

きよすみやま

い

追

忍

い

あだまれて清澄山を出でしに、おいてしのび出でられたり

てんかだいいち

ほけきよう

ほうこう

ごしろう

うたが

思

しは、天下第一の法華経の奉公なり。後生は疑いおぼすべ

からず。

と い

ほけきよういちぶはつかんにじゅうはつぽん

なか

なにもの

問うて云わく、法華経一部八卷二十八品の中に、何物か

かんじん

肝心なる。

こた

い

けこんぎよう

かんじん

だいほうこうぶつけこんぎよう

あこんぎよう

答えて云わく、華嚴經の肝心は大方広仏華嚴經、阿含經の

かんじん

ぶつせつちゅうあこんぎよう

だいじつきよう

かんじん

だいほうどうだいじつきよう

肝心は仏説中阿含經、大集經の肝心は大方等大集經、

はんによきよう

かんじん

まかはんにやはらみつきよう

そうかんぎよう

かんじん

般若經の肝心は摩訶般若波羅蜜經、双觀經の肝心は

ぶつせつむりようじゆきよう

かんぎよう

かんじん

ぶつせつかんむりようじゆきよう

あみだきよう

仏説無量壽經、觀經の肝心は仏説觀無量壽經、阿彌陀經

かんじん

べつせつあみだきよう

ねはんぎよう

かんじん

だいはつねはんぎよう

の肝心は仏説阿彌陀經、涅槃經の肝心は大般涅槃經。かく

いつさいきよう

みな

によぜがもん

かみ

だいもく

きよう

のごとくは一切經は皆、如是我聞の上の題目その經の

かんじん

だい

だい

しょう

しょう

だいもく

肝心なり。大は大につけ、小は小につけて、題目をもつ

かんじん

だいにちきよう

こんごうちようきよう

そしつじきようとう

て肝心とす。大日經・金剛頂經・蘇悉地經等も、またま

ほとけ

たかくのごとし。仏もまたかくのごとし。大日如来・

だいにちによらい

にちがつとうみようぶつ

ねんとうぶつ

だいっうぶつ

うんらいおんのうぶつ

日月灯明仏・燃灯仏・大通仏・雲雷音王仏、これらもまた

なうち

ほとけ

しゅじゅ

とく

具

いま

ほけきよう

名の内にその仏の種々の徳をそなえたり。今の法華経も、

によぜがもん

うえ

みようほうれんげきよう

またもつてかくのごとし。如是我聞の上の妙法蓮華経の

ごじ

すなわ

いちぶはちかん

かんじん

いっさいきよう

かんじん

五字は、即ち一部八巻の肝心、またまた一切経の肝心、

いっさい

もろもろ

ぶつ

ぼさつ

にじよう

てん

にん

しゅら

りゅうじんとく

ちようじよう

一切の諸の仏・菩薩・二乗・天・人・修羅・竜神等の頂上

しょうほう

の正法なり。

と

い

なんみようほうれんげきよう

こころ

知

もの

とな

問うて云わく、南無妙法蓮華経と心もしらぬ者の唱うる

なむだいほうこうぶつけこんぎよう

こころ

もの

とな

さいとう

と、南無大方広仏華嚴経と心もしらぬ者の唱うると、齊等

なりや、せんじん くどくさべつ浅深の功德差別せりや。

こた い答えて云わく、せんじんと浅深等あり。

うたが い疑つて云わく、こころその心いかん。

こた い答えて云わく、しょうが つゆ しづく い みぞ え小河は露と涓と井と渠と江とをば収おさむれ

ども、大河をおさめず。収大河は露乃至小河を撰たいが つゆないししょうが おさむれども、

たいかい大海をおさめず。あごんぎよう せいこうとう ろけん阿含経は井江等・露涓をおさめたる小河の

ごとし。ほうどうきよう あみだきよう だいにちきよう けごんぎようとう しょうが方等経・阿弥陀経・大日経・華嚴経等は小河を

たいがおさむる大河なり。ほけきよう ろけん せいこう しょうが たいが てんう法華経は露涓・井江・小河・大河・天雨

とう いっさい みず いったい 漏 たいかい たと み あつ等の一切の水を一滌ももらさぬ大海なり。譬えば、身の熱き

もの だいかんすい ひとり

寝

涼

しょうすい

ひとり

ふ

者の大寒水の辺にいねつればすずしく小水の辺に臥し

くる

ごぎやく

ほうぼう

だいいっせんだいにん

あごん

ぬれば苦しきがごとし。

五逆・謗法の大一闡提人、阿含・

けごん かんぎよう だいにちきようとう

しょうすい

ひとり

たいがい

おおねつ

散

華嚴・觀經・大日經等の小水の辺にては大罪の大熱さん

ほけきよう

だいせつせん

うえ

ふ

ごぎやく

ひぼう

じがたし。法華經の大雪山の上に臥しぬれば、五逆・誹謗・

いっせんだいう

おおねつ

さん

ぐしや

かなら

一闡提等の大熱たちまちに散ずべし。されば、愚者は必ず

ほけきよう

しん

おのおのきようぎよう

だいもく

やす

おな

法華經を信ずべし。各々經々の題目は易きこと同じとい

ぐしや

ぐしや

とな

くどく

てんちうんदै

たと

えども、愚者と愚者との唱うる功德は天地雲泥なり。譬え

おおづな

だいき

き

しょうりき

しょうとう

ば、大綱は大力も切りがたし、小力なれども小刀をもて

容易

切

たと

けんせき

どんとう

だいき

ばたやすくこれをきる。譬えば、堅石をば鈍刀をもてば大力

も破り^わがたし、利劍^{りけん}をもてば小力^{しょうりき}も破りぬべし。譬^{たと}えば、

くすり^知 ^{ふく}やまい止 ^{じき} ^{ふく}

薬はしらねども服すれば病やみぬ、食は服すれども病や

たと ^{せんやく} ^{いのち} 延 ^{ぼんやく} ^{やまい} 癒

まず。譬^{たと}えば、仙薬は命をのべ、凡薬は病をいやせども命

をのべず。

うたが ^い にじゅうはつぽん ^{なか} ^{かんじん}

疑^{うたが}つて云わく、二十八品の中にいずれか肝心なる。

こた ^い ^い ^{ほんぽんみなじ} ^{したが} ^{かんじん}

答えて云わく、あるいは云わく、品々皆事に随つて肝心

ほうべんぽん ^{じゆりようほんかんじん}

なり。あるいは云わく、方便品・寿量品肝心なり。あるい

い ^{ほうべんぽんかんじん} ^{じゆりようほんかんじん}

は云わく、方便品肝心なり。あるいは云わく、寿量品肝心

かいじごにゆうかんじん

なり。あるいは云わく、開示悟入肝心なり。あるいは云わ

い

じつそうかんじん

く、実相肝心なり。

と い なんじ こころ

問うて云わく、汝が心いかん。

こた 答う。なんみようほうれんげきよう

かんじん

肝心なり。

しょう

その証いかん。

こた い あなん もんじゆとう

によぜがもん どううんぬん

答えて云わく、阿難・文殊等、「如是我聞」等云々。

と い こころ

問うて曰わく、心いかん。

こた い あなん もんじゆ

はちねん あいだ

ほけきよう

答えて云わく、阿難と文殊とは、八年が間、この法華経

むりよう ぎ いくくいちげいちじ のこ ちようもん

の無量の義を一句一偈一字も残さず聴聞してありしが、

ほとけ めつご けつじゆう とき くひやくくじゆうくにん あらかん ふで そ

仏の滅後に結集の時、九百九十九人の阿羅漢が筆を染め

てありしに、妙法蓮華經とかかせて、次に「如是我聞」と

とな

たま

みようほうれんげきよう

ごじ

いちぶはちかんにじゅうはつぽん

唱えさせ給いしは、妙法蓮華經の五字は一部八卷二十八品

かんじん

かこ

とうみようぶつ

とき

ほけきよう

の肝心にあらずや。されば、過去の灯明仏の時より法華經

講

こうたくじ

ほううんほつし

によぜ

まさ

しよもん

をこうぜし光宅寺の法雲法師は、『如是』とは、將に所聞を

つた

ぜんだい

いちぶ

あ

とううんぬん

りようぜん

伝えんとす。前題に一部を挙ぐるなり」等云々。靈山に

親

聞

てんだいだいし

によぜ

まのあたりきこしめしてありし天台大師は、『如是』とは、

しよもん

ほつたい

とううんぬん

しやうあんだいしい

きしやしやく

い

所聞の法体なり」等云々。章安大師云わく「記者釈して曰

じよおう

きよう

げんい

の

げんい

もん

こころ

わく、けだし、序王とは經の玄意を叙ぶ。玄意は文の心を

の

とううんぬん

しやく

もん

こころ

だいもく

ほけきよう

述ぶ」等云々。この釈に「文の心」とは、題目は法華經の

こころ みようらくだいしい いちだい きようほう おさ ほつけ もん

心なり。妙楽大師云わく「二代の教法を収め、法華の文の

こころ い とううんぬん

心を出だす」等云々。

てんじく しちじつかこく そうみよう がつしこく にほん ろくじつかこく

天竺は七十箇国なり。総名は月氏国。日本は六十箇国、

そうみよう にほんこく がつし な うち しちじつかこく ないしにんちく ちんぼう

総名は日本国。月氏の名の内に七十箇国、乃至人畜・珍宝

皆 にほん もう な うち ろくじゅうろつかこく でわ は

みなあり。日本と申す名の内に六十六箇国あり。出羽の羽も

おうしゅう こがね ないしくに ちんぼう にんちく ないしじとう じんじゃ

奥州の金も、乃至国の珍宝・人畜、乃至寺塔も神社も、

にほん もう にじ な うち おさ てんげん

みな日本と申す二字の名の内に摂まれり。天眼をもつては、

にほん もう にじ み ろくじゅうろつかこく ないしにんちくとう 見

日本と申す二字を見て六十六国乃至人畜等をみるべし。

ほうげん にんちくとう

法眼をもつては、人畜等のここに死し、かしこに生まるを

見

もみるべし。譬えは、人の声をきいて体をしり、跡をみて

だいしよう

はちす

いけ

だいしよう

はか

あめ

りゆう

大小をしる。蓮をみて池の大小を計り、雨をみて竜の

ぶんざい

考

皆

いち

いつさい

あ

理

分齊をかんがう。これはみな一切の有ることわりなり。

あごんぎよう

だいもく

おおむねいつさい

阿含経の題目には大旨一切はあるようなれども、ただ

しようしやかいちぶつ

たぶつ

けごんぎよう

かんぎよう

だいにちきようとう

小釈迦一仏のみありて他仏なし。華嚴経・観経・大日経等

いつさいあ

にじよう

ほとけ

様

にはまた一切有るようなれども、二乗を仏になすようと

くおんじつじよう

しやかぶつ

れい

はな咲

み生

いかずち鳴

久遠実成の釈迦仏なし。例せば、花さいて菓ならず、雷な

あめ下

つづみ

おと

まなこ

もの

見

によにん

つて雨ふらず、鼓あつて音なし、眼あつて物をみず、女人

こ産

ひと

いのち

たましい

だいにち

あつて子をうまず、人あつて命なし、また神なし。大日

の真言、薬師の真言、阿弥陀の真言、観音の真言等、また

かくのごとし。彼の経々にしては大王・須弥山・日月・

ろうやく によいしゆ りけんとう だいおう しゆみせん にちがつ

良薬・如意珠・利剑等のようなれども、法華経の題目に対す

うんदै しやうれつ みなおのおのとうたい じゆう うしな

れば、雲泥の勝劣なるのみならず、皆各々当体の自用を失

れい しゆしやう ひかり ひと にちりん 奪 もろもろ

う。例せば、衆星の光の一つの日輪にうばわれ、諸の

くろがね ひと じしやく あ りせい 尽 だいけん しょうか あ

鉄の一つの磁石に値って利性のつき、大剣の小火に値つ

ゆう うしな ごにゆう ろにゆうとう ししおう にゆう あ みず

て用を失い、牛乳・驢乳等の師子王の乳に値って水とな

しゆこ じゆついちけん あ うしな くけん しょうこ あ いろ

り、衆狐が術一犬に値って失い、狗犬が小虎に値って色を

へん

変ずるがごとし。

なみようほうれんげきよう

もう

なむあみだぶつ

ゆう

なむだいにち

南無妙法蓮華經と申せば、南無阿弥陀仏の用も、南無大日

しんこん

ゆう

かんぜおんぼさつ

ゆう

いつさい

しよぶつ

しよきよう

しよぼさつ

真言の用も、觀世音菩薩の用も、一切の諸仏・諸經・諸菩薩

ゆう みな

みようほうれんげきよう

ゆう

うしな

か

きようぎよう

の用、皆ことごとく妙法蓮華經の用に失わる。彼の經々

みようほうれんげきよう

ゆう

か

みな

徒

物

は妙法蓮華經の用を借らずば、皆いたずらのものなるべし。

とうじがんぜん

理

にちれん

なんみようほうれんげきよう

ひろ

当時眼前のことわりなり。日蓮が南無妙法蓮華經と弘むれ

なむあみだぶつ

よう

つき

欠

しお

干

ば、南無阿弥陀仏の用は月のかくるがごとく、塩のひるが

あきふゆ

くさ

枯

こおり

にってん

解

ごとく、秋冬の草のかるるがごとく、氷の日天にとくるが

見

ごとくなりゆくをみよ。

と い

ほうまこと

問うて云わく、この法実にいみじくば、など、迦葉・

かしよう

あなん めみよう りゆうじゅ むじやく てんじん なんがく てんだい みようらく でんぎよう
阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親・南岳・天台・妙楽・伝教
とう ぜんどう なむあみだぶつ 勧 かんど ぐつう

等は、善導が南無阿弥陀仏とすすめて漢土に弘通せしがご

えしん ようかん ほうねん にほんこく みなあみだぶつ

とく、恵心・永観・法然が日本国を皆阿弥陀仏になしたる

勧 たま

がごとく、すすめ給わざりけるやらん。

こた い なん いにしえ なん いま 始

答えて云わく、この難は古の難なり。今はじめたるに

めみよう りゆうじゅぼさつとう ほとけ めつごろつびやくねん しちひやくねん

はあらず。馬鳴・竜樹菩薩等は仏の滅後六百年・七百年

とう だいろんじ ひとびとよ 出 だいじようきよう ぐつう

等の大論師なり。この人々世にいでて大乘経を弘通せし

もろもろ しょうじよう ものうたが い かしよう あなんとう

かば、諸々の小乗の者疑つて云わく「迦葉・阿難等は、

ほとけ めつごにじゅうねん しじゅうねんじゅうじゅ たま しょうほう 弘 たま

仏の滅後二十年・四十年住寿し給いて正法をひろめ給い

によらいいちだい かんじん

ぐつう たま

しは、如来一代の肝心をこそ弘通し給いしか。しかるに、

ひとびと

く くう むじよう む が ほうもん

せん たま

この人々はただ苦・空・無常・無我の法門をこそ詮とし給い

いま めみよう りゆうじゆとう 賢

かしよう あなんとう

しに、今、馬鳴・竜樹等かしこしというとも、迦葉・阿難等

過

いち かしよう ほとけ 会

さと

にはすぐべからずへこれ一。迦葉は仏にあいまいらせて解

得

ひと ひとびと ほとけ 会

りをえたる人なり。この人々は仏にあいたてまつらずへこ

に げどう じよう らく が じよう た ほとけ い

れ二。外道は常・楽・我・浄と立てしを、仏世に出で

たま く くう むじよう む が と たま

させ給いて苦・空・無常・無我と説かせ給いき。このもの

じよう らく が じよう 言 ほとけ ごにゆうめつ

どもは常・楽・我・浄といえり。されば、仏も御入滅な

かしようとう

隠 たま だいろうくてん まおう

りぬ。迦葉等もかくれさせ給いぬれば、第六天の魔王がこ

のものが身に入りかわりて仏法をやぶり外道の法とな

ぶつぼう

怨

こうへ

破

くび

さんとするなり。されば、仏法のあだをば、頭をわれ、頸

斬

いのち

断

じき

とど

くに

お

もろもろ

しょうじょう

をきれ、命をたて、食を止めよ、国を追え」と諸の小乗

ひとびともう

めみよう

りゅうじゅとう

いち

ににん

の人々申せしかども、馬鳴・竜樹等はただ一・一人なり。

ちゅうや

あつく

こえ

聞

ちようぼ

じようもく

被

昼夜に悪口の声をきき、朝暮に杖木をこうぶりしなり。し

ににん

ほとけ

おんつか

まさ

まきよう

かれども、この二人は仏の御使いぞかし。正しく摩耶経に

ろっぴやくねん

めみようい

しちひやくねん

りゅうじゅい

と

は六百年に馬鳴出でて、七百年に竜樹出でんと説かれて

そろう

うえ

りようがきようとう

き

ふほうぞうきよう

候。その上、楞伽経等にも記せられたり。また付法蔵経

もう

及

もろもろ

しょうじょう

には申すにおよばず。されども諸の小乗のものどもは

もち

りふじん

責

によらい

げん

いま

用いず。ただ、理不尽にせめしなり。「如来の現に在すすら

おんしつおお

めつど

のち

きようもん

なお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」の経文は、この

とき

当

すこ

抓

知

だいばぼさつ

げどう

殺

時にあたりて少しつみしられけり。提婆菩薩の外道にころ

ししそんじゃ

くび

斬

思

遣

され、師子尊者の頸をきられし。このことをもつておもいや

たま

らせ給え。

ほとけ

めつごいつせんごひやくよねん

がっし

ひがし

また仏の滅後一千五百年にあたりて、月氏よりは東

かんど

くに

ちん

ずい

よ

てんだいだいししゆつせ

ひと

に漢土という国あり。陳・隋の代に天台大師出世す。この人

い

によらい

しょうぎよう

だい

しょう

けん

みつ

の云わく「如来の聖教に大あり小あり、顕あり密あり、

ごん

じつ

かしよう

あなんとう

いつこう

しょう

ひろ

めみよう

権あり実あり。迦葉・阿難等は一向に小を弘め、馬鳴・

りゆうじゅ

むじやく

てんじんとう

ごんだいじよう

ひろ

じつだいじよう

ほけきよう

竜樹・無著・天親等は権大乘を弘めて、実大乘の法華經

ゆび

ぎ

隠

きよう

をば、あるいはただ指をさして義をかくし、あるいは經の

おもて

述

しちゆうじゆう

しやくもん

ほんもん

面をのべて始中終をのべず。あるいは迹門をのべて本門

顕

ほんじやく

かんじん

言

をあらわさず。あるいは本迹あつて觀心なし」といいしか

なんさんほくしち

じつりゆう

すえすうせんまんにん

とき

笑

ば、南三北七の十流が末数千万人、時をつくり、どつとわら

よ

すえ

ふしぎ

ほつし

しゆつげん

とき

当

う。「世の末になるままに不思議の法師も出現せり。時にあ

われ

へんしゆう

もの

ごかん

えいへいじゆうねん

たりて我らを偏執する者ありとも、後漢の永平十年

ひのとうのとし

いまちん

ずい

さんぞう

にんし

丁卯歳より今陳・隋にいたるまでの三蔵・人師

にひやくろくじゆうよにん

物

知

もう

うえ

ほうぼう

もの

二百六十余人を、『ものもしらず』と申す上、『謗法の者な

あくどう

お

ものしゅつたい

物 狂

り、悪道に墮つ』という者出来せり。あまりのものぐるわ

ほけきよう

も

きた

たま

らじゅうさんぞう

物 知

しさに、法華經を持て来り給える羅什三蔵をも、ものしら

もの

もう

かんど

置

がっし

だいろんじ

ぬ者と申すなり。漢土はさてもおけ、月氏の大論師の

りゆうじゆ

てんじんとう

すうひやくにん

しえ

ぼさつ

じつぎ

竜樹・天親等の数百人の四依の菩薩もいまだ実義をのべ

たま

殺

ひと

たか

給わずというなり。これをころしたらん人は、鷹をころし

おに

過

罰

たるものなり。鬼をころすにもすぐべし」とののしりき。

みようらくだいし

とき

がっし

ほっそう

しんごん

かんど

また妙楽大師の時、月氏より法相・真言わたり、漢土に

けごんしゆう

はじ

責

華嚴宗の始まりたりしをとかくせめしかば、これもまた

騷

さわぎしなり。

にほんこく

でんぎようだいし

ほとけ

めつごいつせんはつぴやくねん

日本国には、伝教大師、仏の滅後一千八百年にあたり

出

たま

てんだい

おんしやく

み

きんめい

このかた

ていでさせ給い、天台の御釈を見て、欽明より已来

にひやくろくじゅうよねん

あいだ

ろくしゅう

責

たま

ざいせ

げどう

二百六十余年が間の六宗をせめ給いしかば、「在世の外道、

かんど どうし

にほん

しゅつげん

ぼう

うえ

ほとけ

めつご

漢土の道士、日本に出現せり」と謗ぜし上、「仏の滅後

いつせんはつぴやくねん

あいだ

がつし

かんど

にほん

えんどん

だいかい

一千八百年が間、月氏・漢土・日本になかりし円頓の大戒

た

言

さいごく

かんのんじ

かいだん

を立てん」というのみならず、「西国の観音寺の戒壇、

とうごくしもつけ

おのでら

かいだん

ちゅうごくやまとのくに

とうだいじ

かいだん

東国下野の小野寺の戒壇、中国大和国の東大寺の戒壇は、

おな

しょうじょうしゅうふん

かい

がしやく

たも

同じく小乗臭糞の戒なり。瓦石のごとし。それを持つ

ほっしとう

やかん

えんこうとう

法師等は、野干・猿猴等のごとし」とありしかば、「あら

ふしぎ ほんし 似 だいこうちゅう くに しゅつげん ぶつきよう

不思議や、法師ににたる大蝗虫、国に出現せり。仏教の

なえいちじ 失 いん ちゅう か けつ ほっし にほん

苗一時にうせなん。殷の紂・夏の桀、法師となりて日本に

う こうしゅう うぶん とう ぶそう ふた よ しゅつげん

生まれたり。後周の宇文・唐の武宗、二たび世に出現せ

ぶつぽう いまう くに 亡 だいじよう

り。仏法もただ今失せぬべし、国もほろびなん」と。「大乘・

しょうじよう にるい ほっししゅつげん しゅら たいしやく こうう こうそ

小乗の二類の法師出現せば、修羅と帝釈と、項羽と高祖

いつこく なら しよにんて 叩 した 振

と一国に並べるなるべし」と、諸人手をたたき、舌をふる

ざいせ ほとけ だいば ふた かいだん

う。「在世には仏と提婆が二つの戒壇ありて、そこばくの

ひとびとし たしゅう 背 わ し てんだい

人々死にき。されば、『他宗にはそむくべし。我が師・天台

だいし た たま えんどん かいだん た ふしぎ

大師の立て給わざる円頓の戒壇を立つべし』という不思議

恐

訃

さよ。あらおそろし、あらおそろし」とののしりあえりき。

きようもんふんみよう

えいざん だいじようかいだん

されども經文分明にありしかば、叡山の大乗戒壇すで

た

たま

ないしろう おな

ほう るふ

に立てさせ給いぬ。されば、内証は同じけれども、法の流布

かしよう

あなん

めみよう

りゆうじゆとう

勝

めみようとう

は、迦葉・阿難よりも馬鳴・竜樹等はすぐれ、馬鳴等より

てんだい

てんだい

でんぎよう

こ

たま

よ

も天台はすぐれ、天台よりも伝教は超えさせ給いたり。世

すえ

ひと

ち

浅

ぶつきよう

ふか

れい

末になれば、人の智はあさく仏教は深くなることなり。例

きようびよう

ほんよう

じゆうびよう

せんやく

よわ

ひと

つよ

せば、軽病には凡薬、重病には仙薬、弱き人には強き

方

人 あ

たす

かとうど有つて扶くる、これなり。

と

い

てんだい

でんぎよう

ぐつう

たま

しろうほう

問うて云わく、天台・伝教の弘通し給わざる正法あり

や。

こた い あ
答えて云わく、有り。

もと い なにもの
求めて云わく、何物ぞや。

こた い みつ
答えて云わく、三つあり。

まつぼう ほとけとど お たも かしよう あなんとう めみよう りゆうじゆ
末法のために仏留め置き給う。迦葉・阿難等、馬鳴・竜樹

とう てんだい でんぎようとう ぐつう たま しようほう
等、天台・伝教等の弘通せさせ給わざる正法なり。

もと い ぎようみよう
求めて云わく、その形貌いかん。

こた い いち にほんないしいちえんぶだいいちどう ほんもん
答えて云わく、一には、日本乃至一閻浮提一同に、本門の

きようしゆしやくそん ほんぞん ほうとう うち しゃか たほう
教主釈尊を本尊とすべし。いわゆる宝塔の内の釈迦・多宝、

ほか しょうぶつ じょうぎようとう しぼさつ きようじ に

外の諸仏ならびに上行等の四菩薩、脇士となるべし。二に

ほんもん かいだん さん にほんないしかんど がつし いちえんぶだい

は、本門の戒壇。三には、日本乃至漢土・月氏・一閻浮提に、

ひと うち むち 嫌 いちどう たじ 捨

人ごとに有智・無智をきらわず一同に他事をすてて

なんみようほうれんげきよう とな 広

南無妙法蓮華經と唱うべし。このこといまだひろまらず。

いちえんぶだい うち ほとけ めつごにせんにひやくにじゅうごねん あいだ いちにん

一閻浮提の内に仏の滅後二千二百二十五年が間、一人も

とな にちれんいちにん なんみようほうれんげきよう なんみようほうれんげきようとう こうえ

唱えず。日蓮一人、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經等と声

惜 とな

もおしまず唱うるなり。

れい かぜ したが なみ だいしよう たきぎ ひ

例せば、風に随って波の大小あり、薪によつて火の

こうげ いけ したが はちす だいしよう あめ だいしよう りゆう

高下あり、池に随って蓮の大小あり、雨の大小は竜に

よる。根ねふかければ枝えだしげし、源みなもと遠ければ流ながれながしと

いう、これなり。周しゅうの代の七百年は文王ぶんおうの礼孝れいこうによる。秦しん

の世よほどもなし、始皇しこうの左道さどうなり。

日蓮にちれんが慈悲じひ曠大こうだいならば、南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきようは万年まんねんの外未来ほかみらい

までもながるべし。日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじようの盲目もうもくをひらける

功德くどくあり。無間地獄むけんじごくの道みちをふさぎぬ。この功德くどくは、伝教・

天台てんだいにも超え、竜樹りゅうじゆ・迦葉かしようにもすぐれたり。極樂百年ごくらくひやくねんの

修行しゆぎようは穢土えどの一日いちにちの功くに及ばず。正像二千年しょうぞうにせんねんの弘通ぐつうは

末法まつぽうの一時いちじに劣るか。これひとえに、日蓮にちれんが智ちのかしこき

にはあらず、時のしからしむるのみ。とき 春は花さき、秋は菓

なる。生 夏はあたたかに、冬はつめたし。なつ 暖 ふゆ 冷 時のしからしむる

にあらずや。

われめつど のち のち ごひやくさい うち えんぶだい こうせんる ふ

「我滅度して後、後の五百歳の中、閻浮提に広宣流布し

だんぜつ あくま まみん してん りゆう やしゃ くはんだとう

て、断絶して悪魔・魔民・諸天・竜・夜叉・鳩槃荼等にそ

たよ え どううんぬん きようもん 虚

の便りを得しむることなかれ」等云々。この経文もしむな

しやりほつ けこうによらい かしようそんじゃ

しくなるならば、舍利弗は華光如来とならじ、迦葉尊者は

こうみようによらい もつけん たまらばっせんだんこうぶつ

光明如来とならじ、目犍是多摩羅跋梅檀香仏とならじ、

あなん さんかいえじざいつうおうぶつ まかはじやはだいびくに

阿難は山海慧自在通王仏とならじ、摩訶波闍波提比丘尼は

いっさいしゅじようきけんぶつ

やしゅだら　ごそくせんまんこうそうぶつ

一切衆生喜見仏とならじ、耶輸陀羅は具足千万光相仏とな

さんぜんじんてん

けろん

ごひやくじんてん

もうご

おそ

らじ。三千塵点も戲論、五百塵点も妄語となりて、恐らく

きようしゅしやくそん

むけんじごく

お

たほうぶつ

あび

ほのお

咽

は教主釈尊は無間地獄に堕ち、多宝仏は阿鼻の炎にむせ

じつぼう

しよぶつ

はちだいじごく

すみか

いっさい

ぼさつ

び、十方の諸仏は八大地獄を栖とし、一切の菩薩は

いっぴやくさんじゅうろく

く

受

ぎ

一百三十六の苦をうくべし。いかでか、その義あるべき。

ぎ

にほんこく

いちどう

なんみようほうれんげきよう

その義なくば、日本国は一同の南無妙法蓮華経なり。

はな

ね

帰

しんみ

ど

留

くどく

されば、花は根にかえり、真味は土にとどまる。この功德

こ　どうぜんぼう

しょうりよう

おんみ

集

は故道善房の聖霊の御身にあつまるべし。

なんみようほうれんげきよう

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

けんじにねんたいさいひのえねしちがつにじゅういちにち

しる

建治二年太歳丙子七月二十一日、これを記す。

こうしゅう はきいのごう みのぶのたけ

あわのくに どうじよのこおり きよすみさん

甲州 波木井郷 蓑歩岳より 安房国 東条郡 清澄山、

じょうけんぼう

ぎじょうぼう

もと

おく

たてまつ

浄顯房・義城房の本に送り奉る。